

学部・研究科等の現況調査表

研 究

平成20年6月

東京芸術大学

目 次

1. 美術学部・美術研究科	1-1
2. 音楽学部・音楽研究科	2-1
3. 映像研究科	3-1

1. 美術学部・美術研究科

I	美術学部・美術研究科の研究目的と特徴	1 - 2
II	分析項目ごとの水準の判断	1 - 4
	分析項目 I 研究活動の状況	1 - 4
	分析項目 II 研究成果の状況	1 - 16
III	質の向上度の判断	1 - 19

I 美術学部・美術研究科の研究目的と特徴

東京芸術大学美術学部・美術研究科は、前身である東京美術学校の創設以来 120 年を超える歴史を持ち、我が国唯一の国立芸術大学として、美術分野における優れた作家・研究者の養成と美術作品の創作研究活動を使命とし、これまで世界的なレベルの作家・研究者を輩出し、数多の美術展や研究誌において作品や研究成果を発表し続け、我国の美術界における指導的役割を果たしてきた。

いうまでもなく、美術領域の研究機関において最も重要なのは、その本質として個人の指向性と意志に基づく自由な創作研究活動である。本学部・研究科の教員の創作・研究活動は、その多様性と深さにおいて、我が国の美術分野の基盤を形成してきた。

本学部・研究科は、こうした教員個人としての多様な創作研究活動を尊重するとともに、芸術活動による地域社会への貢献などを基軸とした組織的な創作研究活動を展開することにより、我が国の美術分野の発展と芸術文化の振興に資することを研究目的としている。

また、本学部・研究科は、これまでに培われてきた日本美術の伝統を継承していくとともに、新しい芸術の先導役となること、芸術による地域振興や感性を生かしたものづくりへの積極的貢献など、多様な期待を多方面(美術愛好者など美術に関心を寄せる人々だけでなく、自治体や企業等)から受けている。

本学部・研究科は、絵画(日本画・油画)・彫刻・工芸・デザイン・建築・先端芸術表現・芸術学・文化財保存学(本専攻は大学院独立専攻)の研究領域で編成されており、上述した研究目的の具現化と多方面からの期待に応えるため、以下に記す4つの柱を中心に、時代とともに多様化している近年の芸術表現全般を視野において、創作研究活動を展開している。

1 未来への創作・研究活動の新たな展開

美術領域の研究機関において最も重要なのは、個人の指向性と意志に基づく自由な創作研究活動である。これは、これまで蓄積してきた伝統や遺産を継承しつつも、未来を指向する新たな表現方法を確立し、新たな理論を生み出そうとする試みであり、美術の本質的な特徴でもある。こうした創作研究活動のうち、美術作品の創作に関する本学部・研究科における活動は、その多様性と深さにおいて、国内外の様々な機関から高い評価を得ているものと自認している。また、研究分野においても、美術領域という特性から、創作や保存に資するような芸術理論・歴史研究あるいは技法に関する基礎的研究を重視している。

2 芸術活動による地域社会への積極的貢献

現代の美術においては、創作物の社会への還元が強く求められている。また、前記した個人の創作活動においても、その根源において広く社会に開かれた視点が求められている。こうした認識の下、本学部・研究科では、地域社会への積極的貢献を行う創作研究活動を重要視している。これは、単に作品の公開展示による社会への貢献にとどまらず、地域の伝統産業との共同作業による創作活動、あるいは地域住民の直接参加によるワークショップの開催など多様な側面を持つものを積極的に開催し、新たな文化作り的一端に貢献する。

3 異分野との融合による新しい芸術手法への挑戦

美術の領域では、絵画・彫刻・工芸・デザイン・建築など、既に確立された分野が存在している。その分野内で蓄積されてきた技術や技法の継承も重要であるが、これに加えて分野の垣根を越えた横断的な取り組みも重要である。中でも、美術という領域以外の様々な異分野の知見、特に発展著しい科学技術・生産技術の成果を取り込んで新たな展開を志向することは急務の課題であると考えている。そこで、異分野との融合による新しい芸術表現や研究手法の創出をめざして、工学や医学などの他分野との協働を積極的に行う。

4 先端技術を用いた新しい文化財保存・修復の実践

かけがえのない貴重な文化財の保存・修復は、新たな創作活動と並ぶ本研究科の重要な柱である。文化財の保存・修復においては、伝統的な技法を重視することが基本であるが、最新の科学技術を積極的に取り入れ、素材や物理的な形状を分析や解析を行ない、現代では失われ忘れ去られた技法の復原、劣化した部分の再現、新たな表現技法の模索、修復材料や修復技法の創生、文化財保存に有益な保存環境の提言など実践的な立場から研究を行う。

以上述べてきたように、芸術のなかの美術という括りであるが、その活動の領域は幅広く、多岐にわたっている。また、研究により得られた成果は学会、研究会はもとより各種外部機関で発表するなどして、その成果は社会へ広く還元されている。それと同時に、社会からのさまざまな評価を踏まえて新たな活動をおこなっている。なお、本学部・研究科の創作・研究活動は、アトリエ等での活動を共有することで、大学院生を中心とした学生への教育活動とリアルタイムで連動していることを強調しておきたい。

II 分析項目ごとの水準の判断

分析項目 I 研究活動の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 研究活動の実施状況

(観点に係る状況)

美術学部は、絵画(日本画・油画)・彫刻・工芸・デザイン・建築・芸術学・先端芸術表現の7科から構成され、古美術研究施設及び写真センターを学部附属機関として有している。また、美術研究科は独立専攻である文化財保存学専攻を加えた8専攻からなる(資料1-1参照)。本学部・研究科の研究組織は、美術の諸領域をカバーしていること、特に日本画や工芸といった主に日本の伝統的造形芸術に関する知識や技術を専門的に行う学科から、技術等の進歩によって新しく生まれた表現や「美術」の分野を超える領域横断的分野の先端芸術表現専攻、さらに、人類共通の貴重な財産である美術工芸品をはじめとする文化財の保存や修復に関する研究や伝統技法の研究などを総合的に行う文化財保存学を設けていることが特徴である(資料1-2参照)。この文化財保存学専攻において、文化財を後世へ伝えるために、保存修復技術の研究やその基礎となる保存科学とが有機的に結合し、美術の諸領域とも連携しながら研究を進めていることも本学部・研究科の特徴と言える。

資料1-1 学部と研究科の関係

美術学部	美術研究科	
	(修士課程)	(博士後期課程)
絵画科	絵画専攻	美術専攻
彫刻科	彫刻専攻	
工芸科	工芸専攻	
デザイン科	デザイン専攻	
建築科	建築専攻	
先端芸術表現科	先端芸術表現専攻	
芸術学科	芸術学専攻	
	文化財保存学専攻	文化財保存学専攻

資料1-2 美術学部・美術研究科の教育研究組織

学科・専攻等	専任教員の専門分野	専任教員数					
		性別	教授	准教授	講師	助教	合計
絵画	日本画, 油画, 版画, 壁画, 油画技法材料	男	10	7	1	2	20
		女	0	0	0	0	0
彫刻	石彫, 木彫, 金属, 彫塑	男	5	2	0	1	8
		女	0	0	0	0	0
工芸	彫金, 鍍金, 鍛金, 漆芸, 陶芸, 染織, 木工芸, ガラス造形	男	7	5	1	1	14
		女	0	0	0	1	1
デザイン	視覚・演出, 視覚・伝達, 視覚・構成, 空間・演出, 空間・設計, 機能・演出, 機能・設計, 映像・画像, 環境・設計, 描画・装飾造形	男	6	4	0	2	12
		女	0	0	0	0	0
建築	建築設計, 構造計画, 環境設計, 建築理論	男	5	2	0	1	8
		女	0	0	0	0	0
先端芸術表現	地域と芸術, 言語と身体, 科学技術と表現, 素材と創造性	男	3	6	0	0	9
		女	2	0	0	1	3
芸術学	美学, 工芸史, 西洋美術史, 日本・東洋美術史, 美術教育, 美術解剖学	男	5	7	0	1	13
		女	0	1	0	2	3
文化財保存学	保存修復, 保存科学, システム保存学	男	11	3	0	1	15
		女	0	1	0	1	2
附属古美術研究施設	日本・東洋美術史	男	0	0	0	0	0
		女	0	0	0	1	1
附属写真センター	写真	男	0	0	0	1	1
		女	0	0	0	0	0
合計		男	52	36	2	10	100
		女	2	2	0	6	10

美術分野という特性上、本学部・研究科における創作研究活動の基盤は、個展や論文発表など旺盛な個人の創作研究活動にあり(下記、資料 1-3, 1-4 参照)、その原資となる科学研究費補助金や受託研究・受託事業は近年増加の傾向にある(資料 1-5~1-8(P. 1-8~1-11)参照)。そうした創作研究活動は、各教員が運営する研究室の活動をベースに、必要に応じて研究室を超えて専攻内や専攻間で横断的に連携して研究を推進している。また、研究においては共有のアトリエや工房を使用する形態をとる場合もある。ここで各教員は自らの創作研究活動を行ないながら、そこに大学院生等も参加し、全体として学部・研究科としてのまとまった大きな創作研究活動となり、それとともに、創作研究活動の質をより高めつつ、同時に大きな教育的効果も期待できることになる。

しかしながら、大学における研究活動はややもすると研究室単位の閉ざされた状況をまねきかねない。この課題を打破するために、本学部・研究科ではこれまでも分野・領域の枠を越えた試みを行ってきた(資料 1-9(P. 1-11~1-13)参照)。特に、平成 11 年に始まった「取手アートプロジェクト」は研究室の横断的なつながりを基礎に地域との連携の活動の第一歩として開始された。このプロジェクトを企画する中で地域連携のあり方の模索の連続であった。このような試行を踏まえて、平成 19 年度より「上野タウンアートミュージアム」と題した横断的かつ総合的な研究プロジェクト体制(資料 1-10(P. 1-13)参照)を構築し、文部科学省から 3 年間の特別教育研究経費の助成を得て実施し、各教員の専門領域を持ち寄って分野や領域を越えた研究を推進することで活力を高めている。このプロジェクトは、学内外の様々な分野の研究者や研究機関あるいは公共団体・市民と連携して、新たな視点からの創作研究を推進するもので、研究の質の更なる向上と視点の多角化をはかりつつ、地域貢献の観点からも大きな成果を得られるものと考えている。

また、平成 19 年度に実施した「藝大茶会」(資料 1-11(P. 1-14)参照)は、日本の伝統文化の茶道とのコラボレーションをとおして新たな表現を考えた価値あるプロジェクトである。「藝大茶会」では、日本の伝統文化である茶と美術との融合の可能性を探るため、(1)本学部・研究科の異なる研究分野・領域の教員が一同にかいして創作を行い、協働して 5 つの”創作茶席”を開設、(2)幅広い研究分野・領域の教員がそれぞれ教員自身のモチベーションを生かした茶道具を制作・展示、(3)本学が芸術をリードする研究機関であるという立場を活かし、4 流派の家元(裏千家、遠州茶道宗家、表千家、武者小路千家)の茶席を開催した。これにより、茶道ならびに芸術の世界に新たな風を吹き込むことができたと考えている。また、茶席には幅広い世界から多く参加を得て、総合芸術としての“茶”の新たな魅力を味わっていただくことが出来たと自負している。さらに「藝大茶会」によって引き出した美術の新しい視点を今後生かしていくことは、より幅広いより深みのある創作研究につながっていくものと確信している。

資料 1-3 研究活動の実施状況(教員 1 人あたりの平均値)

調査対象期間: H16.4~H19.5

調査対象者: H19.4.1 在籍の専任教員

	単位: 件
個展, グループ展等の開催	8.40
著書, 論文等の発表	3.59
学会, 国際シンポジウム, 他大学等での招待講演(国内)	2.25
学会, 国際シンポジウム, 他大学等での招待講演(海外)	0.76
他機関の芸術文化普及活動への協力	4.78
学外での審議会等の委員就任	3.09

※他機関の芸術文化普及活動への協力(テレビ講座等講師, イベント等の企画・協力, 新聞等への寄稿など)

※学外での審議会等の委員就任(審議会等の委員, 学会役員, コンクール審査員など)

資料 1-4 主な個展, グループ展等

※資料 1-3 のうち、「個展, グループ展等の開催」として分類された主なもの

氏名	職位	展覧会等の名称(発表場所又は設置場所名, 実施年)
植田一穂	准教授	植田一穂展(ギャラリー・イツ, 2005 年 11~12 月) 植田一穂展(福屋 広島店, 2006 年 6 月)
梅原幸雄	教授	梅原幸雄展 紀伊徒然(日本橋三越, 2007 年 6 月) 日本画「今」院展(パリ三越エトワール, 2007 年 4 月)
齋藤典彦	准教授	齋藤典彦展(森田画廊/東京, 2004 年-2005 年-2006 年) 齋藤典彦展”記憶の絵-Shaman moon から in her garden へ”(広島市立大学 芸術資料館/広島, 2005 年 10 月)

東京芸術大学美術学部・美術研究科 分析項目 I

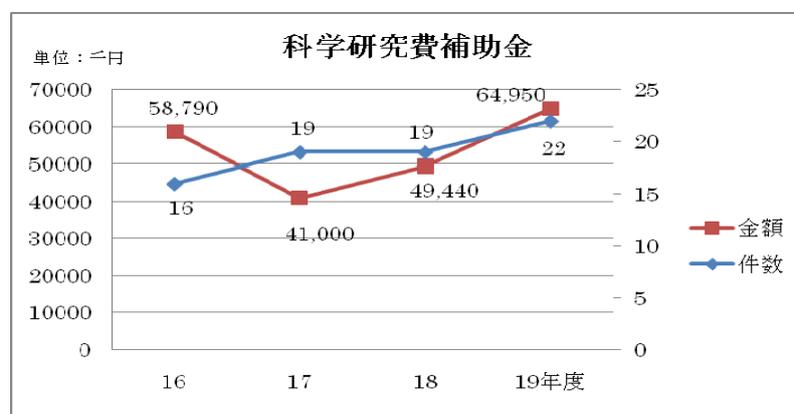
関 出	教授	「関 出」展(一期一絵/東京, 2006年7月) 「画家が歩いたベルギーの古都」奥谷博・大津英敏・滝沢具幸・関出(高島屋/東京・大阪・名古屋・京都, 2005年4月～6月)
手塚雄二	教授	現代日本画の探求者―手塚雄二 花月草星展(高島屋/日本橋・京都・横浜・名古屋, 2006年) 手塚雄二新作展(松坂屋/名古屋・銀座・静岡, 2004年)
吉村誠司	准教授	日本画「今」院展(バリ三越エトワール, 2007年4月) 春の足立美術館賞(足立美術館, 2005年)
海老洋	助教	海老洋個展(広島市立大学 芸術資料館, 2006年11月) 文化庁主催 第38回 現代美術選抜展(岩手県立美術館ほか, 2004年11月～2005年2月)
絹谷幸二	教授	「サーカスを描く」絹谷幸二・幸太「双穹の翼展」二人展(銀座日動画廊, 2007年4月) 「イタリアを描く」絹谷幸二展(全国の三越, 2006年5月～2007年3月)
小山穂太郎	准教授	「光の打刻／白夜」(秋山画廊/東京, 2006年2月) カーサ・スギモト2006(京都市指定文化財 杉本家, 2006年10月)
坂口寛敏	教授	「坂口寛敏展-パスカルの庭・都市軸・時間軸」(群馬県渋川市美術館, 2007年3月-5月) 「記憶・美術」(長野県小海町高原美術館, 2006年10月)
保科豊巳	教授	個展(アルスギャラリー, 2005年) 個展(表参道ギャラリー, 2005年)
坂田哲也	教授	21世紀を担う巨匠・今そして未来展(三越/日本橋・大阪・高松, 2004年4月, 2005年4月) 八月会(日動画廊 銀座, 2005年7月)
櫃田伸也	教授	参加してエンジョイ展(八王子市要美術館, 2006年6月～7月) 絵画名品展(豊田市美術館, 2006年10月～11月)
東谷武美	教授	メキシコ-日本 in グアナフアト現代版画交流展(グアナフアト大学ギャラリー, メキシコ, 2005年8月～9月) 第5回エジプト国際ナショナルプリントトリエンナーレ展(カイロ美術館, エジプト, 2006年3月)
三井田盛一郎	講師	EXHIBITION 2006a landmark MIIDA SEIICHIRO(GALLERY ゆう(岐阜, 大垣), 2004年2月) Aus Holz...LINDE WABER + MIIDA SEIICHIRO(オーストリア大使館文化フォーラム, 2006年10月)
佐藤一郎	教授	佐藤一郎展(三越/本店, 仙台, 2004年4月～5月) 「油一」油絵具発売記念展覧会(芸大アートプラザ, 2007年5月)
大西博	准教授	三史展(PICI ギャラリー ソウル 韓国, 2006年3月) 個展(不二画廊/大阪, gallery OPEN DOOR/東京, 2004, 05, 06, 07)
工藤晴也	准教授	松江市立病院モザイクオブジェ(松江市立病院, 2005年3月) 取手競輪場サイクルアートプロジェクト舗床モザイク(取手競輪場, 2006, 7月～2007年3,4月)
佐々木浩一	助教	大韓民国青年ビエンナーレ(大邱市文化芸術センター, 2006年12月) 中径展 V(府中美術館市民ギャラリー, 2006年8月)
木戸修	教授	個展(色彩美術館, 2004年) 個展(高島屋東京店, 2006年)
北郷悟	教授	北郷 悟 彫刻展(いわき市立美術館, 2004年11月) パブリック環境への作品の設置 生命の川 2006(鳥取県倉吉市小鴨小学校, 2007年2月)
林武史	准教授	「駅 2006 待ち人の眼差し Vol.1 仙台」(JR仙台駅/宮城, 2006年11月～2007年1月) 個展「林 武史展」(伊勢現代美術館/三重, 2006年4月～6月)
深井隆	教授	深井 隆 個展(相生森林美術館, 2006年) 深井 隆 個展(高島屋/日本橋, 高崎, 2007年)
原真一	准教授	個展(ギャラリー手, 2005年) 個展(ギャラリーせいほう, 2006年7月)
山本正道	教授	近代日本の彫刻(神奈川県立近代美術館別館, 2006年) 「彫刻を楽しむ」(ヘンリームーア, マリノリニ, チャドウィック, ジャコモマンズー, 山本正道)(上原近代美術館, 2006年)
米林雄一	教授	日韓芸術大学交流展(芸術のデンドウハンガラム美術館(韓国, ソウル), 2005年8月) 二紀展(東京都美術館, 2005年10月)
小俣英彦	助教	「FROM LIFE」北村西望生誕地現代彫刻プロジェクト(長崎県南島原市南有馬町, 2006年11月) アトリエの末裔あるいは未来(旧平櫛田中邸, 2006年12月)
増村紀一郎	教授	第53回 日本伝統工芸展「片身替漆皮箱」出品(東京日本橋三越本店, 2006年9月～10月) わざの美:「乾漆朱塗提盤」(東京国立近代美術館蔵)出品(英国大英博物館, 2007年7月～10月)
三田村純一	教授	三田村 有純 小品展(銀座ギャラリー田中, 2006年) 個展(銀座和光ホール, 2004年)
荒川朋子	助教	mobile-art2(GALLERY 千空間, 2005年) 伊丹国際クラフト展「酒器・酒杯台」(伊丹市立工芸センター ほか, 2006年)
菅野健一	准教授	グループチェリモヤ展(練馬区立美術館, 2006年7月) 市村富美夫・菅野健一 2人展(ワコール 銀座アートスペース, 2006年9月)
山下了是	教授	山下了是染色作品展(ギャラリー田中(銀座), 2004年12月) 山下了是染色作品展(ギャラリー田中(銀座), 2006年12月)
篠原行雄	准教授	日韓現代メタルアート展(ARKO Gallery, Seoul, Korea, 2006年) The International Metalwork 金属とその周辺(静岡文化芸術大学ギャラリー, 2006年7～8月)
丸山智巳	准教授	SOFA exhibition(New York / Chicago/Florida, 2007年6月, 10月) Mobilia Gallery exhibition(Bosutonn, 2007年)

東京芸術大学美術学部・美術研究科 分析項目 I

山本浩二	助教	越後妻有アートトリエンナーレ 2006 大地の芸術祭(十日町市下条願入旧冬期分校,2006年7月-8月) 「土から生まれるもの コレクションがむすぶ生命と大地」展(東京オペラシティアートギャラリー,2007年1月~3月)
赤沼潔	准教授	第8回韓日現代美術交流展(韓国 蔚山,2005年) アートフォーラム展(仙建ギャラリー,2006年)
橋本明夫	教授	グループ ARAGANE/EXHIBITION(ワコール銀座アトスペース,2005年3月,2006年3月,2007年3月) 三重県尾鷲地区地域活性ものづくり実行委員会フェスタアール等の活動(三重県紀北町,2004~2007年)
飯野一朗	教授	現代の「日本の金工」展(デンマーク王立工芸博物館,2004年11月~2005年1月) 「ジュエリーの今:変貌のオブジェ」展(東京国立近代美術館工芸館,2006年10月~12月)
島田文雄	教授	ISCAEE2006 国際陶芸教育交流年會陶芸展(中国北京市,精華大学美術学院,2006年10月) 彩磁,釉彩の彩り展(千葉県立美術館,2005年11月~2006年1月)
豊福誠	准教授	豊福 誠 作陶展(工芸いま(新橋),2005,2006年) 豊福 誠 作陶展(京王百貨店(新宿),2005年)
田中一幸	教授	国際交流作品展(韓国大邱大学校美術館,2005年8月) 日韓芸術大学交流展(ソウル大学美術館/東京芸術大学美術館,2005年9月)
藤原信幸	講師	「林亘退任記念東京芸術大学ガラス造形研究室展」(東京芸術大学大学美術館陳列館,2006年10月) 「藤原信幸ガラス作品展」(新宿京王百貨店美術工芸サロン,2004年,2005年,2006年)
池田政治	教授	標のオブジェ(東京都上野動物園内,2007年) 群馬県 芸術の「原」表現(群馬県,2004年,2005年,2006年)
尾登誠一	教授	2007. MIRANO SALONE(イタリア ミラノ FIERA 会場,2007年4月) Bird House Project(雑誌発表(2007年.中国.韓国にて展示),2007年5月)
河北秀也	教授	デザインのアイコン展(銀座松屋,2004年8月) 第1回企業デザイン展「Iichiko design 展」(東京芸術大学陳列館,2005年4月)
清水和洋	准教授	「鉄のポケットパーク」(文京区,春日交差点,2006年3月) 東京芸術大学.アートプラザ.インテリアデザイン(東京芸術大学,2005年10月)
中島千波	教授	絵画創作発表(おぶせミュージアム中島千波館,2004年,2005年,2006年) 絵画創作「中島千波の世界展」還暦(高島屋各店舗,おぶせミュージアム,北澤美術館,2005年10月~2006年9月)
長濱雅彦	准教授	ミラノサローネ(インテリアデザイン)(ミラノサローネ サテライト(見本市会場)/ミラノ(イタリア),2007年5月) ケイリングランプリ ユニフォームデザイン(京王閣 競輪場,2006年12月)
橋本和幸	准教授	大邱大学・4ヶ国国際交流デザイン展(大邱大学(韓国),2007年4月) ホテルモントレグループのインテリアデザイン(札幌,長崎,銀座,福岡,赤坂,半蔵門,京都,大阪など,1997年~2007年3月)
蓮見智幸	教授	動物園のデザイン展(INAX ギャラリー名古屋, INAX ギャラリー東京,2004年) 東京芸術大学 視覚デザイン研究室展(銀座 ギャラリー中沢,2004年)
松下計	准教授	レオナルド・ダ・ヴィンチ展広報制作物デザイン(朝日新聞社.東京国立博物館,2007年3月) 21_21 デザインサイト展覧会カタログデザイン(三宅一生財団.Tokyo Mid Town 21_21 Design Site,2007年6月)
箕浦昇一	教授	箕浦昇一 個展(銀座 77 ギャラリー,2005年11月)
齋藤 篤	助教	SIS 社/社章デザイン制作(横浜市中区不老町,2005年4月) 書画プロジェクト/制作発表(荒川区町屋,2005年5月~2006年2月)
島名 毅	助教	EXHIBITION C-DEPOT 2006 ーナチュラルー(横浜赤レンガ倉庫,2006年) IMS 展~次世代を担う若者達~(天神イズムプラザ,2006年)
片山 和俊	教授	旧児玉希望邸画室移築再生(住宅建築 2006年3月号,2005年8月竣工) 仏蘭西屋(住宅建築 2006年9月号,2005年10月竣工)
北川原 温	教授	871228(キース・ヘリング美術館)の設計(山梨県北杜市小淵沢町,2007年4月) シーボン. 本社の設計(神奈川県川崎市宮前区,2006年3月)
黒川 哲郎	教授	地域材活用施設整備事業 北蟹谷多目的交流施設(富山県小矢部市,2006年3月) うきは市立総合体育館建設設計競技当選(福岡県うきは市,2007年1月)
益子 義弘	教授	吉村順三建築展(企画・運営)(本学美術館,2005年12月)
六角 鬼丈	教授	KIJO ROKKAKU Mandala.Muzeum Zmysłów(プロツワフ建築博物館(ポーランド),2006年4月~5月) KIJO ROKKAKU Mandala.Muzeum Zmysłów(クオツコ博物館,2006年6月~7月)
木津 文哉	准教授	個展(高島屋/なんば・日本橋・名古屋,2007年6月~7月) 個展(平野アートギャラリー,2007年1月)
館山 拓人	助教	「2006 YEAR END EXHIBITION OF MINI SCULPTURE」(ギャラリーせいほう,2006年12月) 館山拓人 個展 「背後にあるもの」(メタルアートミュージアム光の谷,2007年4月~5月)
本郷 寛	教授	個展 (本郷寛彫刻展-こころとかたち-)(松坂屋本店/名古屋,2006年9月) 立体造形の複眼展(松坂屋/名古屋,上野,2007年6月~7月)
伊藤 俊治	教授	「フォト・ドキュマン 2006 旅する写真」展(相模原市多目的ホール,2006年10月) 「四次元との対話/岡本太郎から始まる日本の現代美術」展(岡本太郎美術館,2006年4月)
小谷 元彦	准教授	ストーリーテラーズ(森美術館,2005年) ARS06(キアスマ現代美術館/フィンランドヘルシンキ,2006年1月)
木幡 和枝	教授	田中泯独舞公演「透体脱落」企画制作(東京,松本,京都,2006年11月~12月) アートアワード東京 07・共同キュレーション(東京駅行幸通り地下ギャラリー,2007年4月~5月)
佐藤 時啓	准教授	個展 Gleaning Light(Leslie Tonkonow Gallery/ニューヨーク,2005年12月~2006年1月)

		個展 Tokihiro Sato :Japanese Photography(TAI Gallery /サンタフェ,2006年7月～9月)
鈴木 理策	准教授	個展「Sakura」(Yoshii Gallery /N.Y, U.S.A,2006年4月～6月) グループ展「縄文と現代～二つの時代をつなぐかたちとこころ」(青森県立美術館,2006年10月～12月)
高山 登	教授	アート@つちざわ「2006. 10. 4. 11:54」(岩手県東和町土沢地区,2006年) 写真でみるSPACE TOTUKA '70展(スペース23℃,2006年)
田甫 律子	教授	Millennium Springs (ミレニアムの泉)(ArtsPark at Young Circle, Hollywood, FL, USA,2007年3月完成 常設) 30億年のゼロ(名古屋ミッドランドスクエア,2007年2月完成 常設)
日比野 克彦	准教授	アジア代表日本(九州国立博物館,2006年6月～7月) HIBINO DNA AND... 「日比野克彦応答せよ!!」(岐阜県美術館,2006年10月～12月)
古川 聖	准教授	新作作品によるコンサート/Poly Reading (42ch 空間のために)(ZKM(center for arts and media/Germany) KUBUS ホール, Germany,2006年12月) BUBBLES (インタラクティブ インスタレーション)(Phaeno Science Center, Wolfsburg, Germany,2005年に設置, 常設展示)
松野 誠	准教授	NINAGAWA 十二夜(歌舞伎座,2007年7月) クリティック・ライン・プロジェクト(インターネット,2002-2006年)
渡辺 好明	教授	「ワンダリング・ウィンド-日本現代美術の3人」展(トルコ・イスタンブール,2006年1月～2月) 展示「光ではかられた時 -夏至の灯火-」(SPICA art,2007年6月)
辻 賢三	准教授	文明の出会い展(NHK技研ギャラリー,2005年10月) 毘沙門天立像・歓喜天蓮台修復(百濟寺,2006年7月)
簗内 佐斗司	教授	簗内 佐斗司展 笑う門には福来る(日本橋高島屋 他5会場,2007年3～6月) 簗内 佐斗司 彫刻展 花まつりによせて(はせがわ銀座店ギャラリー,2007年4～5月)
宮廻 正明	教授	平成涅槃図(青松寺本)(青松寺,2007年3月) 展覧会 個展「AMA」(高島屋/日本橋,大阪,京都,横浜,名古屋,岐阜,米子,2007年3月～6月)
劉 煥杲	助教	日本画二人展(京葉銀行本店アルファバンクアートフォーラム,2006年12月)
木島 隆康	教授	「木島隆康」展 -テンペラ画の制作過程-(色彩美術館,2006年12月)
田淵 俊夫	教授	刻をりをり 田淵俊夫展(日本橋三越はじめ松坂屋・大丸4店,2006年8月) 高島屋美術部創設百年 一日・月・田淵俊夫展(日本橋高島屋はじめ高島屋系列6店,2007年4月)
椎木 康彦	助教	字界へ-隘路のかたち(愛知県・長久手文化の家および町内4箇所,2005年7～8月)

資料 1-5 科学研究費補助金獲得額



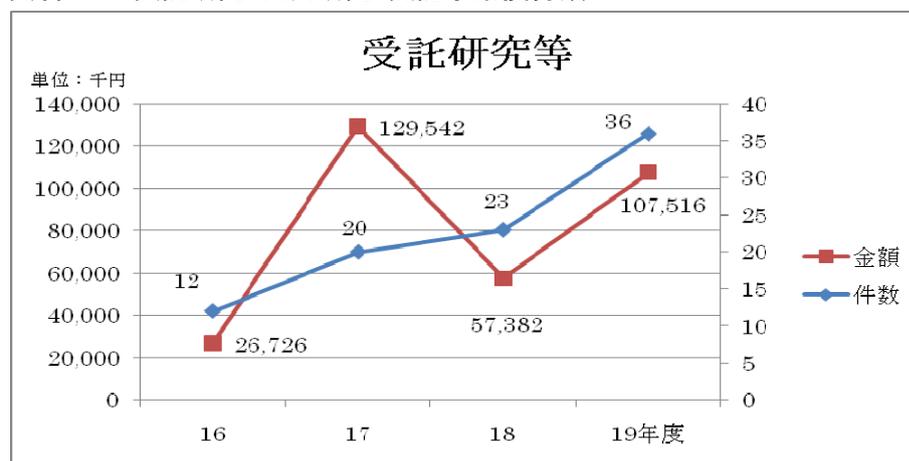
資料 1-6 平成 16～19 年度科学研究費補助金交付課題一覧

※職位は、課題が採択された時点のもの。

研究種目	研究代表者 職 氏名			研究課題
基盤研究(B)	美術学部	教授	佐藤 一郎	東京美術学校西洋画科卒業制作自画像の技法・材料に関する総合的研究
基盤研究(B)	美術学部	教授	竹内 順一	明治期における音楽録音資料・蠟管(ろうかん)の保存体制と公開手法の研究
基盤研究(B)	美術学部	教授	北川原 温	「聴く建築」、音の景相に基づいた新たな空間設計手法の立案に向けた研究
基盤研究(B)	美術学部	教授	片山 和俊	中国客家民居-遷移と住居形式の変容プロセス
基盤研究(B)	美術学部	准教授	工藤 晴也	世界遺産ガッラ・プラチディア廟モザイク壁画の保存修復調査と修復技法の実証的研究
基盤研究(B)	美術学部	助教	須賀 みほ	天神縁起絵巻・デジタルアーカイブによる類本の保存と基礎資料の構築
基盤研究(B)	美術研究科	教授	簗内佐斗司	平等院及び浄瑠璃寺阿弥陀像を中心に3Dデジタルデータによる定朝様式の比較研究
基盤研究(B)	美術研究科	教授	北田 正弘	日本刀のナノ組織を手本にした新しい超鉄鋼材料の開発
基盤研究(B)	美術研究科	教授	木島 隆康	新たなアフガニスタン壁画保存の展開-高松塚・キトラ古墳を遡る壁画の保存と修復
基盤研究(B)	美術研究科	准教授	桐野 文良	金属文化財の腐食機構解析に基づく新防食法の開発
基盤研究(C)	美術学部	准教授	光井 渉	初期書院造の空間構成に関する研究

基盤研究(C)	美術学部	准教授	越川 倫明	ティントレット派素描のカタログ化:英国所蔵作品総目録の作成
基盤研究(C)	美術学部	准教授	野口 昌夫	中・南部トスカーナにおける歴史的小都市と地域の形成に関する研究
萌芽研究	美術研究科	教授	北田 正弘	文化財のナノ構造分析のための極微量試料採取法の開発
若手研究(B)	美術学部	助教	星 恵理子	金属元素に起因する日本画用和紙の焼け現象解明と新抑制法の開発
特定領域研究	美術研究科	教授	稲葉 政満	和紙製造法の技術革新
基盤研究(B)	美術学部	教授	島田 文雄	13世紀～14世紀の龍泉窯陶磁技法“青磁大皿”の復元的焼成研究
基盤研究(B)	美術研究科	教授	稲葉 政満	アルカリ性紙と酸性紙の接触変色機構の解明
基盤研究(C)	美術学部	教授	尾登 誠一	宇宙茶室2ー微小重力空間における“柔”環境デザイナー
基盤研究(C)	美術学部	助教	北郷 悟	彫刻におけるデジタル立体造形の可能性と新たな表現法の研究と応用
基盤研究(C)	美術学部	助教	古川 聖	音楽構造と建築空間の深層における共通構造の知識表現を通じた総合表現システムの研究
特定領域研究	美術研究科	助教	稲葉 政満	ライデン国立民族学博物館所蔵シーボルト和紙コレクションの紙質調査
基盤研究(B)	美術学部	教授	越 宏一	星座図像の研究ー「アラテア」写本を中心に
基盤研究(B)	美術学部	助教	桂 英史	地域精神医療と芸術表現に関する総合的研究
基盤研究(B)	美術研究科	助教	桐野 文良	金属文化財の腐食挙動と新防食法の開発
基盤研究(C)	美術学部	教授	北川原 温	空間芸術と情報技術を融合した新たな都市空間の研究ー劇場的空間の創出ー
基盤研究(A)	美術学部	教授	松尾 大	芸術における公共性
基盤研究(C)	美術学部	教授	伊藤 隆道	流体と音響を用いたインタラクティブアートの制作と表現
基盤研究(C)	美術学部	助教	佐藤 時啓	原始的光学性を活用した体験型高精細多方位カメラの開発と関連芸術表現的運用
基盤研究(C)	美術学部	教授	宮田 亮平	歌舞伎銅鑼の形体と音響心理との関係についての研究

資料 1-7 受託研究・共同研究・受託事業獲得額



資料 1-8 平成 16～19 年度受託研究・共同研究・受託事業 主な受入課題

種別	研究題目	相手先
受託研究	倉吉市打吹玉川地区の伝統的建造物群に関する調査研究	倉吉市
受託研究	加賀市東谷地区の伝統的建造物群に関する調査研究	加賀市
受託研究	取手市指定文化財 東漸寺観音堂の解体調査研究	宗教法人東漸寺
受託研究	茨城県取手市東漸寺「木造馬頭観音立像」の調査研究及び修復研究	宗教法人東漸寺
受託研究	みなかみ町芸術文化村構想の基本構想策定提案	みなかみ町
受託研究	荒川区シンボルマークデザイン及びシンボルマーク使用事例に関する研究	荒川区
受託研究	絵画用紙の諸相とその発揮について	小津産業株式会社
受託研究	国宝「源氏物語絵巻」現状模写	財団法人五島美術館
受託研究	壁画によるまちづくり	取手市
受託研究	地球温暖化対策としての元気な森作り促進事業「人と環境にやさしい茨城県ベンチプロジェクト」	社団法人茨城県トラック協会
受託研究	茨城県取手市長禅寺「十一面観音立像(一木造り)」および「十一面観音立像(漆箔像)」の調査研究および修復研究	宗教法人長禅寺
受託研究	東京都文京区江戸千家「千利休坐像」および「千利休立像」の調査研究および修復研究	江戸千家宗家十世家元 川上不白
受託研究	足立区千住地区・回遊性のある街区実現のための環境デザイン調査及び計画提案	足立区 政策経営部長
受託研究	歴史的建造物の保存・再生に関する事前調査	社団法人 日本住宅建設産業協会
受託研究	小西大閑堂所蔵の木造阿弥陀如来坐像, 木造阿弥陀如来立像(小), 木造阿弥陀如来立像(大), 木造文殊菩薩坐像 調査研究および修復研究	小西大閑堂
受託研究	世界の漆樹に関する比較研究	加賀市

東京芸術大学美術学部・美術研究科 分析項目 I

受託研究	「COCOLABO (コクラボ) 2007「1.5 階」の家。」	株式会社コスモスイニシア
受託研究	望月 桂 油画作品 15 点の調査と修復	望月明美
受託研究	台東区谷中地区 街路・景観デザイン計画	台東区
受託研究	取手けいりんサイクルアートプロジェクトサードステージ	茨城県自転車競技事務所
受託研究	茨城県桜川市小山寺「薬師如来立像」の調査研究および修復研究	天台宗小山寺
受託研究	消失した重要文化財大徳寺方丈障壁画狩野探幽筆「猿曳図」の再現模写	宗教法人 大徳寺
受託研究	安全安心の掲示板モデル色彩デザインに関する研究委託	台東区
受託研究	山口産業(株)社屋外壁全体サイン化(デザイン)による景観的役割	山口産業(株)
受託研究	伊藤康「海景」の調査と修復	愛知県公立学校法人
受託研究	催事商品群のブランディング	株式会社山形屋海苔店
受託研究	「日本の伝統・文化」の副教材の研究・開発委託	東京都教育委員会
受託研究	取手市コミュニティバス運行による地域情報伝達システムの開発研究	三菱ふそうトラック・バス株式会社 茨城ふそう
受託研究	旧吉田邸建物の復原整備設計に関する調査研究	柏市
受託研究	浄瑠璃寺灌頂堂大日如来座像保存修復の研究	宗教法人浄瑠璃寺
受託研究	茨城県坂東市西念寺「阿弥陀如来座像」の調査研究及び修復の研究	宗教法人西念寺
受託研究	古典研究をベースにした現代涅槃図の再現研究	宗教法人青松寺
受託研究	寺社仏閣用チタン建材写真のデザイン方法に関する研究	新日本製鐵株式会社
受託研究	ベンガラ系塗装材の耐光性試験	宗教法人平等院
受託研究	陳澄波油画作品三点の調査と修復	陳重光
受託研究	中村不折油画作品の調査及び修復	財団法人台東区芸術文化財団
受託研究	寛永寺板戸の修復・調査	宗教法人寛永寺
受託研究	光照寺地藏菩薩立像調査研究及び修復	宗教法人常光院
受託研究	「環境都市」ソウルの風景的都市改造に関する調査研究	財団法人アーバンハウジング
受託研究	日枝神社における古江戸、武蔵野の植物画(天井絵)の表現研究と創造	宗教法人日枝神社
受託研究	デジタルメディアを基盤とした新しい芸術創造に関する研究	独立行政法人科学技術振興機構
受託研究	日韓学生交流アートプロジェクトの研究	株式会社電通テック
受託研究	光照寺地藏菩薩立像調査研究及び修復	宗教法人光照寺
受託研究	「同愛会」施設の環境デザイン・マニュアルの作成	財団法人同愛会
受託研究	壁画によるまちづくり	取手市
受託研究	野外空間における舞台芸術の研究－発光する舞台を用いた現代能の創造－	東京ガス豊洲開発株式会社
受託研究	ストリートアートステージプロジェクト	取手市
受託研究	取手市指定文化財 東漸寺観音堂及び仁王門の修復計画に関する調査研究	宗教法人東漸寺
受託研究	「環境都市」ソウルの風景的都市改造に関する調査研究	財団法人アーバンハウジング
受託研究	旧吉田家住宅の調査研究	柏市
受託研究	日枝神社における古江戸、武蔵野の植物画(天井絵)の表現研究と創造	宗教法人日枝神社
受託研究	取手競輪場取手競輪ファン送迎バスラッピングデザイン策定	茨城県自転車競技事務所
受託研究	取手競輪場トータルイメージデザイン策定	茨城県競輪施行者協議会
受託研究	取手「芸術の杜」における芸術・文化展開方策の研究	取手市
受託研究	取手「芸術の杜」における芸術・文化展開方策の研究	株式会社日本設計
受託研究	高橋由一作「上杉鷹山像」基礎調査研究と修復	独立行政法人国立博物館東京 国立博物館
受託研究	芸術・文化を軸とする地域連携の方法について	埼玉県吉川市
受託研究	市章のデザイン及び市章使用事例に関する研究	江戸崎町・新利根町・桜川村・東町合併協議会
受託研究	デジタルメディアを基盤とした新しい芸術創造に関する研究	独立行政法人科学技術振興機構
共同研究	理想的な油絵具の研究	ホルベイン工業株式会社
共同研究	台東区上野・谷中地区の歴史を活かしたまちづくりに関する調査研究	特定非営利活動法人たいとう歴史都市研究会
共同研究	谷中地区まちづくりデザイン指針調査研究	社団法人日本交通計画協会
受託事業	「藝大 Design Project in ADACHI 展」の運営	足立区産業経済部 部長
受託事業	メーブルヒル病院アート展示プロジェクト	株式会社ソリア
受託事業	赤倉芸術交流センターを拠点としたアカデミー・イン・レジデンス	地縁法人赤倉温泉区
受託事業	日銀ウォーキングミュージアム KINCO ～日本銀行×東京芸術大学地下金庫展～(仮称)	日本銀行, 名橋「日本橋」保存会
受託事業	JR上野駅構内上野タウンアートミュージアムPRブース及びフロア広告の制作, 設置及び撤去委託	台東区
受託事業	文化庁委嘱事業「近代の生活文化・技術に関する調査事業」	文化庁
受託事業	上野タウンアートミュージアム岡倉天心作オペラ「白狐」公演委託	台東区

受託事業	「藝大デザインプロジェクトin ADACHI」	足立区産業経済部 部長
受託事業	(仮称)産業技術保存継承センターオープニング事業企画・設計及び監理委託	北九州市
受託事業	文化庁平成18年度人材育成支援事業「芸術系大学等教育機関(調査研究・伝統芸能等分野)による委嘱事業「歌舞伎における国際的な受容のありかたについての実態調査」	文化庁長官
受託事業	文化庁平成19年度人材育成支援事業「芸術系大学等教育機関(調査研究・伝統芸能等分野)による委嘱事業「文化芸術創造のまち—文化振興のための基盤研究—」	文化庁長官
受託事業	文化庁平成18年度人材育成支援事業「芸術系大学等教育機関(調査研究・伝統芸能等分野)による委嘱事業「芸能を中心とする無形の文化財の保護に関わる資料の体系的収集と整備」	文化庁長官
受託事業	文化庁平成18年度人材育成支援事業「芸術系大学等教育機関(人材育成・普及活動・演劇分野)による委嘱事業「舞台表象空間創作の伝承」	文化庁長官
受託事業	「取手けいりんサイクルアートプロジェクトセカンドステージ」全体デザイン委託	茨城県自転車競技事務所
受託事業	国際文化交流・協力推進事業「東京芸術大学・韓国芸術総合学校交流展」—出合い—	文化庁
受託事業	国際シンポジウム「映画作りは学校で学べるか？」	文化庁
受託事業	TGアートセッション	東京ガス株式会社
受託事業	豊洲プロジェクト『蒼楽』	東京ガス豊洲開発株式会社

資料 1-9 大学美術館等での展覧会一覧

※1：会場欄の「本」は大学美術館本館、「陳」は陳列館、「正」は正木記念館

※2：同時開催の展覧会のチケットによる入場者についてカウントしていないため実入場者となっていない。

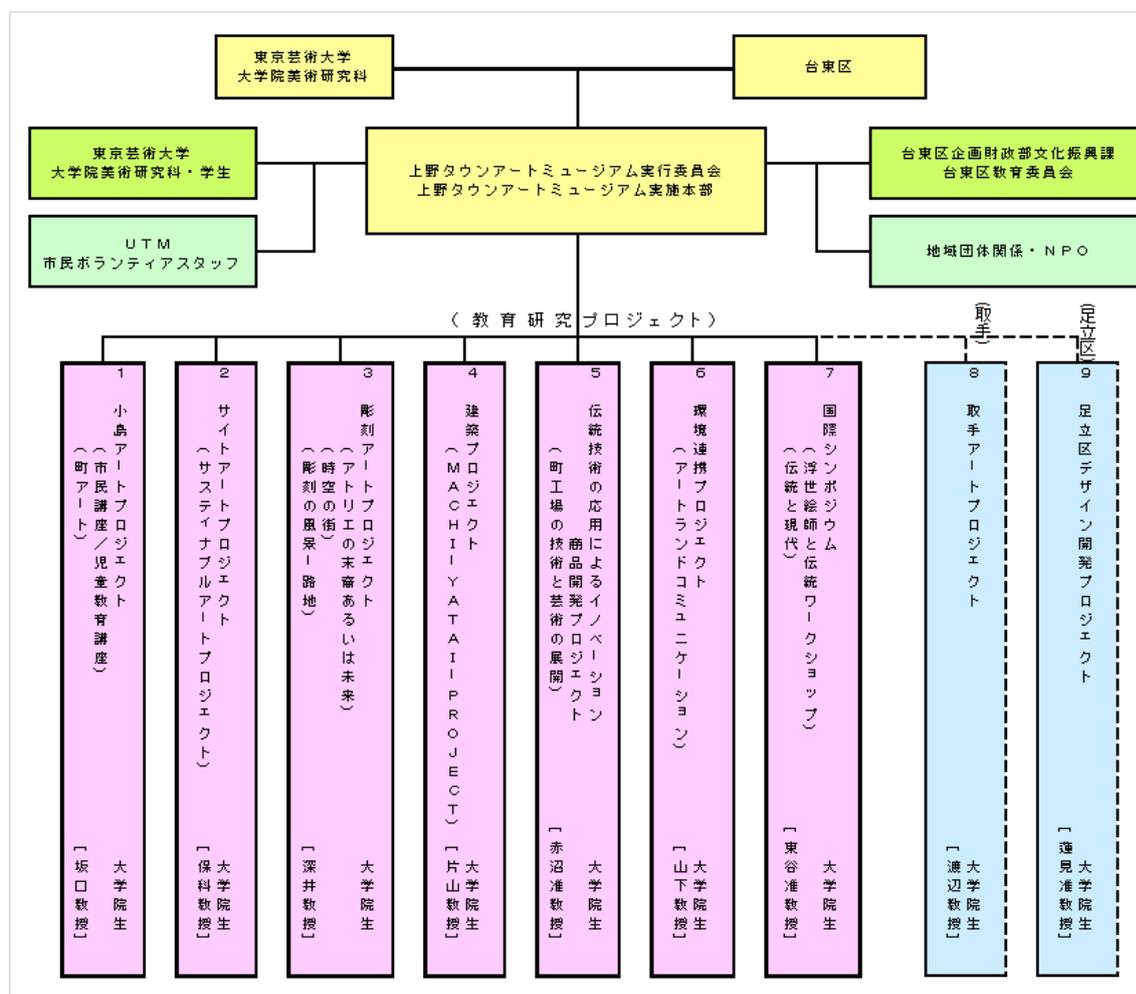
N o.	会場 ※1	展覧会名	会期	合計	1日平均 入場者数
1	本	「再考:近代日本の絵画」展	H16.4.10～6.20(63日間)	39,174	622
2	本	芸大コレクション展 江戸から明治の金属芸術	H16.7.6～8.29(48日間)	2,564※2	53
3	本	横山大観「海山十題」展	H16.7.27～8.29(30日間)	97,889	3,263
4	本	興福寺国宝展	H16.9.18～11.3(40日間)	100,124	2,503
5	本	「HANGA 東西交流の波」展	H16.11.13～1.16(49日間)	20,535	419
6	本	芸大コレクション展 「ドイツ・ネーデルラントの近世版画 —マクシミリアン1世の時代を中心に—」	H16.11.13～H17.1.16(49日間)	1,093※2	22
7	本	福井爽人・中林忠良展	H17.1.27～2.13(16日間)	9,581	599
8	陳	「東京藝大のガラスの作家たち」展	H16.4.24～5.9(16日間)	6,960	435
9	陳	東京・北京・パリ交流ポスター展	H16.5.13～5.23(10日間)	674	67
10	陳	「JEWELLERY」展	H16.6.29～7.11(12日間)	547	46
11	陳	椅子展 2004	H16.9.3～9.12(10日間)	1,095	110
12	陳	「flowmotion」展	H16.9.14～9.20(7日間)	1,058	151
13	陳	「Voice of Site Tokyo-Chicago-NewYork」展	H.16.9.24～10.10(15日間)	2,312	154
14	陳	美術教育研究会展示発表	H16.11.6～11.10(5日間)	718	144
15	陳	「版の記憶／現在／未来」展	H16.11.12～11.25(12日間)	1,096	91
16	陳	ispa JAPAN 国際現代版画展「The PLATES」	H16.11.30～12.5(6日間)	802	134
17	陳	スベレ・フェーン建築展	H16.12.12～H17.1.20(29日間)	7,074	243
18	本	台風被災復興支援 巖島神社国宝展	H17.3.25～5.8(40日間)	59,804	1,495
19	本	芸大コレクション展 資料は繋ぐ—名作と下絵・連作	H17.4.8～5.29(46日間)	38,914	846
20	本	500年の大系 植物画世界の至宝展	H17.6.11～7.18(33日間)	35,908	1,088
21	本	芸大コレクション展 柴田是真—明治宮殿の天井画と写生帖	H17.6.11～8.7(50日間)	33,475	670
22	本	「D/J Brand」展 ドイツに学んだアーティストの発火点	H17.9.1～9.25(22日間)	5,450	248
23	本	「台東区のたからもの」展 —寺社所蔵の文化財に見る歴史・文化—	H17.9.27～10.23(24日間)	5,556	232
24	本	退任記念 堀越保二・手塚登久夫展	H17.10.6～10.23(16日間)	5,513	345
25	本	退任記念 松永勲 染色作品展	H17.11.3～11.20(16日間)	3,525	220
26	本	吉村順三建築展	H17.11.10～12.25(40日間)	39,721	993
27	本	東京芸術大学・韓国芸術総合学校交流展	H17.11.29～12.18(18日間)	2,717	151
28	陳			1,495	83

東京芸術大学美術学部・美術研究科 分析項目 I

29	本	「世界遺産からの SOS」展ーアジア危機遺産からのメッセージー	H18.1.14~2.5(20 日間)	8,884	444
30	本	退任記念 伊藤隆道展	H18.1.19~2.5(16 日間)	3,654	228
31	陳	第 1 回 企業のデザイン展 iichiko design 展	H17.4.11~4.24(13 日間)	3,938	303
32	陳	東京・北京・パリ交流ポスター展	H17.4.28~5.8(10 日間)	1,539	154
33	陳	「文化財保存教育の 40 年」展	H17.5.13~5.16(4 日間)	818	205
34	陳	「日本におけるダダ」展	H17.6.1~6.18(16 日間)	1,656	104
35	陳	にゆうす展。 油画新人スタッフ展 2005	H17.6.21~6.28(7 日間)	574	82
36	陳	「Reflex」展ー黄金背景テンペラ模写と現代における展開・構築ー	H17.7.5~7.22(16 日間)	2,444	153
37	陳	東京芸術大学卒業制作作品 台東区長賞展	H17.7.29~8.9(10 日間)	1,016	102
38	陳	「Rosa!」展 あらわになる色へピンク	H17.9.1~9.25(22 日間)	4,019	183
39	陳	「石の思考」展ー手塚登久夫と芸大石彫ー	H17.10.6~10.23(16 日間)	1,512	95
40	陳	日本画第一研究室発表展	H17.10.26~10.30(5 日間)	960	192
41	陳	退任記念 戸津圭之介の軌跡展	H17.11.3~11.20(16 日間)	3,894	243
42	陳	「スキノデリック」展 彫刻の表層	H18.1.6~1.22(17 日間)	2,995	176
43	本	ドイツ・表現主義の彫刻家:エルスト・ハルハ	H18.4.12~5.28(41 日間)	30,623	747
44	本	芸大コレクション展:大正・昭和前期の美術	H18.4.12~5.28(41 日間)	24,128	588
45	本	ルーヴル美術館展ー古代ギリシア芸術・神々の遺産ー	H18.6.17~8.20(56 日間)	274,496	4,902
46	本	NHK 日曜美術館 30 年展	H18.9.9~10.15(32 日間)	97,688	3,053
47	本	Japan & Korea 漆 arts exhibition 日本・韓国 現代漆芸作家による漆芸の現在	H18.9.28~10.15(16 日間)	12,481	780
48	本	The Wonder Boxーユニヴァーシティ・ミュージアム合同展ー	H18.11.4~12.17(38 日間)	6,789	179
49	本	芸大コレクション展 斎藤佳三の軌跡ー大正・昭和の総合芸術の試みー	H18.11.4~12.17(38 日間)	6,797	179
50	本	野田哲也展	H19.1.11~1.28(16 日間)	3,500	219
51	本	羽生出展	H19.1.11~1.28(16 日間)	3,982	249
52	陳	版画研究室交流展:ヴィクトリア・カレッジ・オブ・アーツ,メルボルン 大学ー東京芸術大学美術学部	H18.4.18~5.2(13 日間)	574	44
53	陳	素描展 日本画第二研究室	H18.8.8~8.20(13 日間)	12,844	988
54	陳	日本画第一研究室発表展	H18.9.13~9.25(13 日間)	3,793	292
55	陳	Good Design Award 1957-2006 Gマーク 50 年, 時代を創ったデ ザイナーと 100 のデザインの物語ー展	H18.10.3~10.13(11 日間)	6,340	576
56	陳	伝統とデザイン 国際交流デザイン展ー日本・イギリス・韓国ー 東京芸術大学, UCCA 芸術大学, 中央大学の 3 校の授業交換に よる学生作品	H18.10.19~10.29(11 日間)	652	59
57	陳	退任記念 堀口光彦展	H18.11.2~11.19(16 日間)	2,387	149
58	陳	林 互退任記念 東京芸術大学ガラス造形研究室展	H18.11.28~12.10(12 日間)	1,760	147
59	陳	東京芸術大学陶芸研究室・大倉陶園共同研究「ディナー食器への 挑戦ーチャイナペインティングの美」	H.19.1.16~1.21 (6 日間)	4,838	806
60	本	東京芸術大学創立 120 周年企画 芸大コレクション展 新入生歓 迎・春の名品選	H19.4.10~6.10(54 日間)	58,823	1,089
61	本	パリへー洋画家たち百年の夢	H19.4.19~6.10(46 日間)	76,658	1,666
62	本	金刀比羅宮 書院の美ー 応挙・若冲・岸岱ー	H19.7.7~9.9(56 日間)	159,065	2,840
63	本	芸大コレクション展 歌川広重《名所江戸百景》のすべて	H19.7.7~9.9 (56 日間)	143,528	2,563
64	本	岡倉天心ー 芸術教育の歩みー	H19.10.4~11.18(40 日間)	25,363	634
65	本	東京芸術大学大学院美術研究科博士審査展	H19.12.4~12.16(12 日間)	4,587	382
66	陳	2006 年度受託研究 茨城県指定文化財 西念寺蔵 阿弥陀如来坐 像修復研究発表会	H19.4.12~4.15(4 日間)	346	87
67	陳	東京芸術大学創立 120 周年企画 ケレンー 主張する色彩ー	H19.4.19~5.3(15 日間)	3,939	263
68	陳	「油画の具」東京芸術大学・ホルベイン工業株式会社 産学共同研 究「理想的な油絵具の研究」報告 産学共同開発 藝大ブランド油 絵具「油ー/YUICHI」発表	H19.5.8~5.20(13 日間)	2,297	177
69	陳	《写真》見えるもの／見えないもの	H19.5.29~6.17(18 日間)	9,547	530
70	陳	表層の内側 III 東京一大邸	H19.6.23~6.29(7 日間)	415	59

71	陳	第2回「企業のデザイン展」JR東日本展―“鉄道のデザイン～過去から現代・未来へ～”	H19.7.3～7.17(15日間)	7,005	467
72	陳	東京芸術大学第二研究室『素描展』―思索のなかで―	H19.7.22～7.31(10日間)	2,306	231
73	陳	自画像の証言	H19.8.4～9.17(39日間)	28,470	730
74	陳	東京芸術大学日本画第一研究室発表展「ICHIKENTEN」	H19.9.20～9.27(8日間)	1,159	145
75	正	田中コレクション展	H19.10.4～10.14(5日間)	1,784	357
76	陳	創作茶席「五色界」展	H19.10.4～10.28(22日間)	5,468	249
77	陳	「物語の彫刻」展	H19.11.16～12.2(15日間)	6,020	401
78	正	田中コレクション展	H19.11.16～12.2(8日間)	2,474	309
79	陳	東京芸術大学退任記念 益子義弘展 ―住景―	H19.12.10～12.23(14日間)	1,813	130
80	陳	国際交流デザイン展	H20.1.10～1.20(10日間)	833	83
81	陳	陶芸企画展	H20.1.21～1.29(9日間)	294	33
※学外会場での本学主催展覧会					
1		日中韓芸術大学交流事業 藝大アーツ・サミット'07 教員作品展美の環 (於:上野日展会館)	H19.10.4～10.14(11日間)	カウント せず	—
2		日本美術「今」展 ―絵画・彫刻・工芸― (於:日本橋三越本店本館・新館7階ギャラリー)	H19.10.16～10.28(13日間)	24,189	1860
3		黒田清輝から藤田嗣治まで―パリに学んだ日本の洋画家たち (於:フランス・パリ文化会館)	H19.10.24～H20.1.26(60日間)	12,750	213

資料 1-10 上野タウンアートミュージアム



※概算要求資料より(取手, 足立区のプロジェクトは上野タウンアートミュージアムと同様に地域連携を院生教育に取り入れたプロジェクトとして参考掲載)

資料 1-11 芸大茶会

① 創作茶席「五色界」(平成 19 年 10 月 4 日～10 月 28 日:大学美術館陳列館)

茶室名	主担当教員	協力教員等
「零庵(ぜろあん)」	尾登誠一(デザイン科)	東京芸術大学美術館
「根庵(たんあん)」	山下了是(工芸科・染織)	三田村有純(工芸科・漆芸), 飯野一朗(工芸科・彫金), 大西博(絵画科・油画)
「幸庵(こうあん)」	橋本和幸(デザイン科)	宮田亮平(学長), 日比野克彦(先端芸術表現科), 前田宏智(工芸科・彫金), 清水泰博(デザイン科)
「石間(いしま)」	林武史(彫刻科)	布施英利(芸術学科・美術解剖), 鈴木理策(先端芸術表現)
「映幻(えいげん)」	小山穂太郎(絵画科)	檀田伸也(絵画科・油画), 大西博(絵画科・油画), 椎木静寧(写真センター), 島田文雄(工芸科・陶芸), 藤原信幸(工芸科・ガラス造形), 小山穂太郎(絵画科・油画)

【茶道具展示 出品教員】

梅原幸雄(絵画科・日本画), 手塚雄二(絵画科・日本画), 植田一穂(絵画科・日本画), 吉村誠治(絵画科・日本画), 関出(絵画科・日本画), 坂口寛敏(絵画科・油画), 小山穂太郎(絵画科・油画), 大西博(絵画科・油画), 檀田伸也(絵画科・油画), 斉藤芽生(絵画科・油画), 工藤晴也(絵画科・壁画), 山本正道(彫刻科), 米林雄一(彫刻科), 北郷悟(彫刻科), 原真一(彫刻科), 飯野一朗(工芸科・彫金), 前田宏智(工芸科・彫金), 篠原行雄(工芸科・鍛金), 丸山智巳(工芸科・鍛金), 橋本明夫(工芸科・鋳金), 赤沼潔(工芸科・鋳金), 島田文雄(工芸科・陶芸), 三田村有純(工芸科・漆芸), 増村紀一郎(工芸科・漆芸), 豊福誠(工芸科・陶芸), 山下了是(工芸科・染織), 菅野健一(工芸科・染織), 林亘(工芸科・ガラス造形), 藤原信幸(工芸科・ガラス), 田中一幸(工芸科・木工芸), 清水泰博(デザイン科), 尾登誠一(デザイン科), 橋本和幸(デザイン科), 長濱雅彦(デザイン科), 古川聖(先端芸術表現科), 鈴木理策(先端芸術表現), 松尾大(芸術学科・美学), 布施英利(芸術学科・美術解剖), 辻賢三(文化財保存学・保存修復・工芸), 上野勝久(文化財保存学・保存修復・建築), 椎木静寧(写真センター), 宮田亮平(学長)

② 藝大茶会

〈 東京芸術大学茶会 〉

第 1 会場：東京芸術大学

石晋室開放

受付(中央棟)

点心席(大浦食堂)

岡倉天心像

藝大美術館

藝大正門

陳列館

正木記念館

西門

九条館

応挙館

六窓庵

転合庵

春草庵

第 2 会場：東京国立博物館

東京国立博物館正門

<p>10月6日(土)</p> <p>家元席：裏千家</p> <p>美術倶楽部席：京都美術倶楽部</p> <p>藝大席：藝大茶道部</p>	<p>10月13日(土)</p> <p>家元席：表千家</p> <p>美術倶楽部席：東京美術倶楽部</p> <p>藝大席：藝大茶道部</p>
<p>10月7日(日)</p> <p>家元席：遠州茶道宗家</p> <p>美術倶楽部席：京都美術倶楽部</p> <p>藝大席：藝大茶道部</p>	<p>10月14日(日)</p> <p>家元席：武者小路千家</p> <p>美術倶楽部席：東京美術倶楽部</p> <p>藝大席：藝大茶道部</p>

(2)分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

資料 1-3(P. 1-5)に示した通り、本中期目標期間における個展等の開催は教員 1 人あたり 8 件、著書・論文も 1 人あたり 3 本を越え、各教員の創作・研究活動は極めて活発である。また、資料 1-5(P. 1-8)に示した通り、科学研究費補助金も、美術という分野設定が無いにも関わらず、平成 16 年度から 19 年度の間金額で 10%、件数で 30%以上の大幅な伸びとなっている。また、資料 1-7(P. 1-9)、資料 1-8(P. 1-9～1-11)で示したように、受託研究等についても、平成 16～19 年度で受託研究 59 件、共同研究 3 件、受託事業 18 件(複数年度に跨る課題があるため資料 1-7 の件数の合計とは一致しない。)に及び、本学部・研究科の特性が広く認知されている証左となっている。またこれまでの取り組みを基盤とした「上野タウンアートミュージアム」(資料 1-10(P. 1-13)参照)が特別教育研究経費の助成対象となった事実は、本学部・研究科の研究活動の状況が広く評価された結果であると考えている。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 研究成果の状況**(観点到に係る状況)**

前記したように、美術分野という特性から、本学部・研究科の研究成果のうち、個人の創作作品については、個展等で発表される機会が大部分であり、その総数は膨大である（資料 1-3(P. 1-5)、資料 1-4(P. 1-5～1-8)参照）。こうした個展等には極めて優れた内容のものが多く、萌芽的な試みもここで数多く試行されており、本学部・研究科にとって最も重要な研究成果を社会へ発表する場である。しかしながら、成果として考える場合、客観性に欠けることが予測される。そこで、本中期目標期間において芸術分野における評価方法のあり方についてワークショップを開催し国公立の美術系大学の評価担当者間の意見交換をおこない、評価のあり方について検討を行った。これとともに、外部評価委員による評価を受け、そこで頂いた意見などをもとに研究活動の評価に生かしている。これらの検討を基本として研究成果の自己評価に入った。あくまで、美術の分野では個人の創作研究活動が基本であるが、別紙「学部・研究科を代表する優れた研究リスト」及び「研究業績説明書」に掲載した成果は、そうした個人の創作研究から大きく発展したもののなかから、学部・研究科に基盤をおいて組織的に行ったもの（研究室等で行っているプロジェクト、科学研究費補助金研究、受託研究、共同研究など）を中心に選定した。これは、冒頭で述べた大学として組織的ならびに重点的に取り組んでいる研究領域に合致するものであり、芸術作品として質の高いものであっても、基礎的な研究活動である教員個人に起因する業績に該当する個展などの業績はあえて含んでいないことは注記しておきたい（資料 1-11 の「受賞例」(P. 1-17～1-18)、別添資料 1-①の「主な新聞記事」(P. 1-21～1-26)には、こうした個人の作品や研究に基づくものを含んでいる）。また、その成果を選定するにあたっては、1) 学術研究論文や文部科学省科学研究補助金など学外の第三者による評価を経た活動に起因するもの、2) 新聞や権威ある雑誌等で紹介された研究活動、3) 外部の美術館や博物館、研究機関、地方公共団体、各種企業などとの連携や依頼による活動、4) 学協会など公的な機関からの表彰、講演依頼を受けた活動、など客観性を重視した選定基準を設けた。

以上の観点から、冒頭の研究目的と特徴で示した本学部・研究科の4つの柱(重点領域)ごとに代表的な研究例をあげる。まずはじめに、未来への創作・研究活動の新たな展開としては、「ミレニアムの泉 (Millennium Springs)」(研究業績説明書 27-01-1008)、「日蝕 0302」(研究業績説明書 27-01-1009) (どちらも上述の選定基準 4)に該当)がある。また、芸術活動による地域社会への積極的貢献としては、「取手アートプロジェクト」(研究業績説明書 27-01-1018) (上述 1)2)3)4)に相当)の実施や「サステイナブルアートプロジェクト」(研究業績説明書 27-01-1024) (基板研究、上述の 2)3)に該当)をはじめとする地域連携ならびにそれを評価する記事が新聞等で紹介されている。また、異分野との融合による新しい芸術手法への挑戦においては、工学分野との融合により生まれた嗅覚ディスプレイを用いた香り料理体験のコンテンツ(研究業績説明書 27-01-1027)やユニバーサルデザインシートベルトのデザイン開発(研究業績説明書 27-01-1028) (どちらも上述の 3)に該当)などがその代表として上げられる。最後に、先端技術を用いた新しい文化財保存・修復の実践では、日本刀のナノ組織を手本にした新しい超鉄鋼材料の開発(研究業績説明書 27-01-1005) (上述の 1)に該当)や超高品位 3D デジタルアーカイブを用いた高句麗古墳壁画の保存と修復のための基礎研究(研究業績説明書 27-01-1003) (上述の評価基準 3)に相当)などを挙げるができる。

このように、別紙「学部・研究科を代表する優れた研究リスト」及び「研究業績説明書」に掲載したのは、本学部・研究科の成果の一部のみであるが、それだけを見ても、国内外の権威ある第三者機関や各種学協会、新聞などから高い評価を得ていることが分かる。さらに、研究の活動範囲は日本はもとより国際性も十分あり、個人をベースに研究者間の連携、研究者と組織との融合によりその成果は大きくエンハンスされている。その結果として評価も国内外に及んでいることは受賞一覧をご覧いただければ明白である。また、本学部・研究科の研究成果は、美術の専門家集団からの評価はもとより、一般市民の関心と呼ぶことも多く、十分な創作研究の成果をあげつつ、広く市民へも美術を普及させていると判断できる。これは、地味ではあるが地域連携・地域貢献活動や社会連携・社会貢献などにおいて重要な役割を果たしてきている(別添資料 1-①(P. 1-21～1-26)参照)。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

本学部・研究科は、唯一の総合芸術系大学として古い歴史と伝統を持ち、これまで日本の美術界をリードしてきたため、社会から期待される水準は極めて高い。こうした状況の中、下記「資料 1-11 受賞例」で示した通り、本中期計画期間に限っても、美術各領域の主だった賞を、本学部・研究科の教員が受賞していることから、美術各領域における専門家からの評価は、期待される水準を上回っていると客観的にいえよう。また別添資料 1-①の「主な新聞記事」(P. 1-21～1-26)で示した通り、本学部・研究科の創作研究活動に対しては、社会からの関心も極めて高く、この面でも期待される水準を上回っているとみなせる。

資料 1-11 受賞例一覧(平成 16～19 年度)

※職名は受賞時ではなく H20.3.31 現在に統一

所属	職名	氏名	受賞名	国内外の別		受賞年
				国内	国外	
日本画	准教授	齋藤 典彦	両洋の眼展 河北倫明賞	○		2005
日本画	准教授	齋藤 典彦	日経日本画大賞(第2回)入選	○		2004
日本画	准教授	齋藤 典彦	日経日本画大賞(第3回)入選	○		2006
日本画	准教授	吉村 誠司	春の足立美術館賞(第1回)	○		2004
日本画	助教	海老 洋	第31回 創画展 創画会賞	○		2005
日本画	助教	海老 洋	第32回 創画会 創画会賞	○		2006
油画	准教授	小山穂太郎	東川国際写真賞 国内作家賞	○		2005
版画	教授	東谷 武美	第5回エジプトインターナショナルプリントトリエンナーレ展グランプリ受賞		○	2006
彫刻	教授	北郷 悟	倉吉緑の彫刻賞(鳥取県倉吉市)	○		2006
彫刻	教授	山本 正道	コンスタンチン・ブランクーシ賞・大賞	○		2004
彫刻	教授	山本 正道	紫綬褒章	○		2005
彫刻	准教授	林 武史	第22回現代日本彫刻展07 毎日新聞社賞	○		2007
鍛金	講師	丸山 智巳	財団法人美術工藝振興財団佐藤基金 第24回「淡水翁賞」	○		2007
漆芸	教授	増村紀一郎	埼玉県春日部市「芸術文化賞」	○		2004
漆芸	教授	三田村有純	文部科学大臣賞	○		2004
デザイン	教授	池田 政治	群馬県総合表彰	○		2005
デザイン	教授	河北 秀也	ジャパンパッケージデザインコンペティション最優秀賞	○		2005
デザイン	教授	河北 秀也	グラスデザインアワードグランプリ	○		2006
デザイン	教授	河北 秀也	グッドデザイン賞	○		2006
デザイン	准教授	清水 泰博	大阪市・戒橋コンペ優秀賞受賞	○		2004
デザイン	准教授	清水 泰博	文京区「鉄のポケットパーク」彩雄秀賞受賞	○		2005
デザイン	准教授	長濱 雅彦	第40回ジャパンゴルフ用品協会賞 プレースコンテスト1席	○		2006
デザイン	准教授	長濱 雅彦	グッドデザイン賞	○		2006
デザイン	准教授	長濱 雅彦	グッドデザイン賞	○		2005
デザイン	准教授	松下 計	文部大臣科学賞	○		2005
建築	教授	北川原 温	ネス・F・ブラウ環太平洋文化建築デザイン賞 大賞		○	2007
建築	教授	北川原 温	イタリア I A 賞 1位		○	2006
建築	教授	北川原 温	公共建築賞特別賞	○		2006
建築	教授	黒川 哲郎	日本建築学会賞(業績)	○		2004

東京芸術大学美術学部・美術研究科 分析項目Ⅱ

建築	教授	黒川 哲郎	第8回木材活用コンクール林野庁長官賞	○		2005
建築	教授	六角 鬼丈	広州大学城メイスティアムコンパ 最優秀賞 (中国)		○	2005
建築	教授	片山 和俊	土木学会デザイン賞最優秀賞	○		2007
先端	准教授	小谷 元彦	六本木クロッシング インターショナルアート・ハイパー・トリプル賞	○		2004
先端	准教授	小谷 元彦	京都府文化賞 奨励賞	○		2007
先端	准教授	鈴木 理策	東川国際写真賞 国内作家賞	○		2006
先端	准教授	鈴木 理策	平成18年度 和歌山県文化奨励賞	○		2006
先端	教授	田甫 律子	Year in Review		○	2007
先端	教授	渡辺 好明	高島屋文化賞	○		2006
先端	教授	渡辺 好明	国土交通省「地域づくり」表彰 国土交通大臣賞	○		2006
先端	教授	渡辺 好明	サントリー財団「地域文化賞」	○		2007
文化財	助教	劉 煥杲	春の院展 奨励賞受賞	○		2006
文化財	教授	北田 正弘	日本金属学会 増本量賞	○		2006
文化財	教授	稲葉 政満	マテリアルライフ学会論文賞	○		2005

Ⅲ 質の向上度の判断

「研究目的と特徴」で述べたように、美術領域の研究機関において最も重要なのは、個人の指向性と意志に基づく自由な創作研究活動である。この創作研究に関しては、本学部・研究科の活動は以前より極めて活発で、資料 1-3(P. 1-5) の「研究活動の実施状況(教員 1 人あたりの平均値)」では、数字のみを見ても極めて活性で、個人研究の成果としての展覧会・個展・論文発表等はいずれも影響力のある内容として社会の評価は高い。これは客観的な視点からの評価結果で、その信頼性も高い。これらは組織における教育研究に反映され、また本学部・研究科建学以来の精神であり、現在ではアイデンティティともなっており、十分な研究の質を備えていると判断している。こうした教員個人の創作研究に加えて、本中期計画期間内には、下記の示すような「質の向上度のあったと判断する取組」も行っており、さらなる質の向上が十分にはかられたと判断できる。

事例①「外部資金を活用した創作研究の進展」(分析項目Ⅰ)

外部資金の導入自体は研究の質とは直接関係しないが、外部資金の導入によって従来は不可能であった創作研究が可能となり、また外部社会からの要請を創作研究に取り込む機会としても大きな意味を持つので、その拡大は創作研究の質の大幅な向上に資するものと考えられる。本学部・研究科においては、資料 1-7(P. 1-9)で示したように受託研究・受託事業の総数が平成 16 年度の 12 件から平成 19 年度には 36 件と飛躍的に増加しており、科学研究費に関しても同期間に 16 件から 22 件に増加している(資料 1-5(P. 1-8)参照)。なお、科学研究費に関しては、芸術分野の新規創設に伴い、平成 20 年度以降は更なる増加が期待できよう。

事例②「上野タウンアートミュージアム」の実施(分析項目Ⅰ, Ⅱ)

文部科学省の特別教育研究経費の助成を得て平成 19 年度から実施を開始したこの事業は、本学部・研究科の教員が、7つの創作研究の柱をたてて取り組んだものである(資料 1-10(P. 1-13)参照)。この事業の実施に際しては、従来の専門分野・領域を越えた横断的な組織を編成して具体的な創作研究テーマを決定し、相互に影響を及ぼしあいながら大きな成果をあげている(例:研究業績説明書 27-01-1024, 27-01-1025, 27-01-1026)。また、東京都台東区及び地域住民の協力を得た地域貢献的な意味合いも重要で、この事業の実施によって、高度ではあるが専門の枠に入り込みがちであった本学部・研究科の創作研究の性格を変えることに大きく寄与し、これによって大きな質の向上がはかられた。

事例③「芸大茶会の開催」(分析項目Ⅰ)

「茶」は日本を代表する文化活動であり、「茶会」は各分野の作品が共存する芸術空間となる。平成 19 年 10 月に東京芸術大学 120 周年記念事業として行った「芸大茶会」では、家元を招来した茶席を設けると同時に、5つの創作茶席を創作した(資料 1-11(P. 1-14)参照)。この創作茶席では、異なる分野・領域に属する教員が共同して、全く異なる性格の茶席空間を提案し、大きな効果をあげた。この試みも、従来の専門分野・領域の垣根を越えるために大きな意味を持ち、創作研究の質の向上に大きく寄与した。



2. 音楽学部・音楽研究科

I	音楽学部・音楽研究科の研究目的と特徴	2 - 2
II	分析項目ごとの水準の判断	2 - 4
	分析項目 I 研究活動の状況	2 - 4
	分析項目 II 研究成果の状況	2 - 1 3
III	質の向上度の判断	2 - 1 8

I 音楽学部・音楽研究科の研究目的と特徴

東京芸術大学音楽学部・音楽研究科は、前身である文部省音楽取調掛・東京音楽学校の創設から120年を越える歴史を有し、その間、すぐれた音楽家・研究者を輩出しつづけ、我が国の音楽文化の発展に主導的な役割をはたしてきた。この間、先進性と独自性をそなえた創作・演奏・研究活動の伝統を次世代に継承するとともに、各時代の音楽文化に要請された課題につねに先駆的に取り組んできた実績も、国内外の高い評価をうけてきた。

現在の本学部・研究科は、作曲・声楽・器楽・指揮・邦楽・楽理・音楽環境創造・音楽文化の専門領域からなっている(資料2-1(P.2-4)、資料2-2(P.2-4~2-5))。これらの各専門領域の特色を生かし、複数領域のさまざまな協働を模索しながら、現代社会において芸術文化関係者および一般の音楽愛好者から本学部・研究科に期待されている伝統の継承と新たな音楽文化の創造をめざして、以下の5つの研究領域に重点をおき、研究を進めている。

1 奏楽堂プロジェクト

奏楽堂を主要な舞台とし、音楽芸術の新たな創造・発信をめざして、音楽に対する現代的な要請にこたえる企画性の高い演奏会をジャンル・領域横断的なプロジェクトとして実施し、本学部・研究科にとって最も基本的な研究成果である音楽演奏を、多様な形式で発信しようとする試みである。創作・演奏・研究・運営といった音楽の各専門領域が揃った本学ならではの活動であり、音楽文化の創造・発信に貢献している。

2 音楽伝統の継承と再生

我が国初の音楽専門機関として、日本のみならず東アジアの近代音楽の創出に大きな役割をはたしてきた本学部・研究科には、他に例をみない貴重な音楽資料とともに、西洋音楽・邦楽を問わず、各時代を特徴づける音楽作品の演奏・上演の実績が蓄積されている。本学がもつ音楽伝統を発掘し、現代に継承・再生させる試みであり、120年の歴史的に培われた本学の特色に基づく独自の活動として、学内外から高い評価を得ている。

3 音楽文化による地域貢献

現代社会においては、音楽をふくむ芸術と日常生活との接点となる地域社会との関係が重視されるとともに、地域振興において芸術文化のはたす役割も注目されている。本学部・研究科では、地元である台東区・足立区や東京都からの受託事業をはじめ、本学とさまざまな関係を結んでいる国内各地域において、地域の文化芸術活動のレベル向上や機会拡大、文化芸術環境の充実を目的に、我が国最高水準の芸術家養成を通じた地域文化活動への貢献及び蓄積された知的財産を活用した先端的な地域振興の在り方を追究している。

4 アジアにおける音楽文化研究の拠点形成

音楽を通じた国際的な教育・研究上の連携を、特にアジアにおける音楽文化研究に集中し、演奏・研究ともにアジア地域の中心となり得る総合的な拠点形成を目指す。アジア諸国との人的交流を一層盛んにするとともに、アジアにおける音楽文化の実態調査や、交流演奏会の企画・実施等を通じて、単なる交流事業ではなく、発展的なストックの形成につながるような研究成果の蓄積を目指し、継続的・発展的な取り組みを行っている。

5 音楽・音響にかかわる新たな手法の開発・研究

メディア表現及び環境創造としての音・音響の可能性に、本学のもつ最先端の施設とノウハウを活用することによってアプローチし、社会における音・音響の新たな手法の開発・創造・発信を目指すものである。音響環境の構築や比較音響心理分析のほか、今日様々な機能を担うようになった都市商業施設の音楽・音響に関する実践研究などが行われ、音響

心理学的な実験と音楽制作の往復運動によって大きな成果を生み出している。

以上のように、本学部・研究科では、音楽という芸術領域において個人的にも組織的にもきわめて多様な活動を展開し、その成果は演奏会や学会のみならず学内外での活発な実践等を通じて広く社会に発信され、現代日本の音楽文化の発展に資するものとなっている。

II 分析項目ごとの水準の判断

分析項目 I 研究活動の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 研究活動の実施状況

(観点に係る状況)

本学部・研究科における創作・演奏・研究活動は、各教員が学内外で個々人の創意にもとづく個性的な活動を精力的に展開している。一人あたり30件を越えるリサイタル・演奏会の実施数はその現れと言えよう(資料2-3(P.2-6), 資料2-4(P.2-6~2-7)参照)。これに加えて、学内においても大学院の研究室を単位(※音楽学部・音楽研究科の教育研究組織については、資料2-1, 2-2参照)としながらも、活動内容に応じて複数の学科や演奏芸術センター・音楽研究センターと協働し、時に学外の機関や研究者とも連携しつつ、多種多様な組織的活動がきわめて活発に行われている。

特に、重点領域としている奏楽堂プロジェクト、音楽伝統の継承と再生においては(重点領域説明書27-05, 27-06及び資料2-8(P.2-13~2-17)参照)、通常の研究室単位の活動を越えて、企画から実施段階まで複数の学科や専門領域による文字通り総力をあげた活動が展開されており、こうした経験が日常的な研究活動にもたらす波及効果は大きい。また、アジアにおける音楽文化研究の拠点形成、音楽文化による地域貢献、音楽・音響にかかわる新たな手法の開発・研究において顕著な学外の機関・研究者との連携も、これまで以上に本学部・研究科の研究発信能力を高める効果を生んでおり、こうした協働への学生の直接的・間接的な参画は、教育面にもプラスに作用していると考えられる。

資料2-1 学部と研究科の関係

音楽学部	音楽研究科	
	(修士課程)	(博士後期課程)
作曲科	作曲専攻	音楽専攻
声楽科	声楽専攻	
器楽科	器楽専攻	
指揮科	指揮専攻	
邦楽科	邦楽専攻	
楽理科	音楽文化学専攻	
音楽環境創造科		

資料2-2: 音楽学部・大学院音楽研究科及び演奏芸術センター 教員一覧

(「大学案内2008」より:平成19年10月現在)

音楽学部・大学院音楽研究科					
■作曲			■指揮		
	野田 暉行	教授		小林 研一郎	教授
	尾高 惇忠	教授		尾高 忠明	客員教授
	浦田 健次郎	教授	■邦楽		
	川井 學	教授	長唄三味線	藤原 睦子	教授
	小鍛冶 邦隆	准教授	長唄	浅見 文子	准教授
■声楽			箏曲(生田流)	安藤 政輝	教授
	伊原 直子	教授	箏曲(山田流)	萩岡 松韻	教授
	川上 茂	准教授	能楽(観世流)	関根 知孝	准教授
	朝倉 蒼生	教授	能楽(宝生流)	武田 孝史	教授
	佐々木 典子	准教授	邦楽囃子	三浦 正義	教授
	福島 明也	准教授	日本舞踊	大橋 萬壽子	准教授
	多田羅 迪夫	教授	■音楽文化学		

■器楽	寺谷 千枝子	教授	音楽学	船山 隆	教授		
	永井 和子	教授		土田 英三郎	教授		
	直野 資	教授		片山 千佳子	教授		
	吉田 浩之	准教授		大角 欣矢	准教授		
	林 康子	招聘教授		塚原 康子	准教授		
	市原 太郎	客員教授		植村 幸生	准教授		
	直井 研二	助教	音楽教育	佐野 靖	教授		
	ピアノ	植田 克己	教授		山下 薫子	准教授	
		青柳 晋	准教授	ソルフェージュ	テシュネ, ローラン	准教授	
		角野 裕	教授		林 達也	准教授	
		伊藤 恵	准教授	応用音楽学	根木 昭	教授	
		北川 暁子	教授		枝川 明敬	教授	
		東 誠三	准教授		畑 瞬一郎	教授	
		渡邊 健二	教授	音楽文芸	松原 千代繁	客員教授	
		迫 昭嘉	教授		成田 英明	教授	
		粕谷 美智子	教授		中嶋 敬彦	教授	
		有森 博	准教授		檜山 哲彦	教授	
	オルガン	タッキーノ, カブリエル	外国人教師	音楽環境創造	杉本 和寛	准教授	
		廣江 理枝	准教授		西岡 龍彦	教授	
		ヴァイオリン	清水 高師	教授	熊倉 純子	准教授	
		浦川 宜也	教授	亀川 徹	准教授		
		澤 和樹	教授	市村 作知雄	准教授		
		漆原 朝子	准教授	毛利 嘉孝	准教授		
		玉井 菜採	准教授	丸井 淳史	講師		
		プーレ, ジェラルド	招聘教授	音楽研究センター	関根 和江	助教	
ヴィオラ		川崎 和憲	准教授				
チェロ		河野 文昭	教授				
コントラバス	山崎 伸子	准教授	演奏芸術センター (学内共同教育研究施設)	松下 功	教授		
	クラリネット	永島 義男		教授	大石 泰	准教授	
	フルート	山本 正治		准教授	海藤 春樹	客員教授	
	オーボエ	金 昌国		教授	西川 信廣	客員教授	
	サクソフォーン	小畑 善昭		教授	瀧井 敬子	客員教授	
	ファゴット	富岡 和男		客員教授	岩崎 真	助教	
		岡崎 耕治		客員教授			
	ホルン	守山 光三		教授			
	トランペット	杉木 峯夫		教授			
	トロンボーン	秋山 鴻一		招聘教授			
打楽器	藤本 隆文	准教授					
室内楽	岡山 潔	教授					
	稲川 榮一	教授					
	松原 勝也	准教授					
古楽	鈴木 雅明	教授					
	野々下 由香里	准教授					

資料 2-3 研究活動の実施状況(教員1人当りの平均値)

調査対象期間:H16.4~H19.5

調査対象者:H19.4.1 在籍の専任教員

単位:件

リサイタル, 演奏会(共演, 一部出演含む)等	30.77
著書, 論文等の発表	2.38
学会, 国際シンポジウム, 他大学等での招待講演(国内)	2.25
学会, 国際シンポジウム, 他大学等での招待講演(海外)	1.38
他機関の芸術文化普及活動への協力	1.82
学外での審議会等の委員就任	5.06

※他機関の芸術文化普及活動への協力(テレビ講座等講師, イベント等の企画・協力, 新聞等への寄稿など)
 ※学外での審議会等の委員就任(審議会等の委員, 学会役員, コンクール審査員など)

資料 2-4 主なリサイタル, 演奏会等

※資料 2-3 のうち, 「リサイタル, 演奏会等」にあたるもののうち, 主なもの。

浦田健次郎	作曲	教授	箏のためのコンチェルティーノ(作曲)(東京, 2006年11月) 五段幻想(二十五弦箏)(作曲)(ケルン, 2005年9月)
尾高惇忠	作曲	教授	二本のクラリネットとピアノのための「Dialogue」初演(二宮和子クラリネットリサイタル)(作曲)(東京文化会館小ホール, 2007年4月) 連弾曲集「音の旅」共演(丹羽悦子ピアノリサイタル)(作曲)(ザ コンサート ホール, 2006年11月)
小鍛冶邦隆	作曲	准教授	オーケストラ・プロジェクト 2006(指揮)(東京芸術劇場大ホール, 2006年10月) 現代の音楽展 2006 オペラ・プロジェクト I (指揮)(東京文化会館小ホール, 2006年3月)
朝倉蒼生	声楽	教授	Liederabend(ピアノ::Konrad Richter) シューベルト・グリーグの歌曲他(王子ホール, 2005年5月) Handel《メサイア》ソプラノソロ(神奈川県立音楽堂, 2005年3月)
伊原直子	声楽	教授	オペラ「カルメン ハイライト」(高崎文化センター, 2007年3月) ニューイヤール ガラ コンサート(オペラシティ タケミツ ホール, 2007年1月)
川上洋司	声楽	准教授	コーラル・アーツ・ソサイエティ第14回定期演奏会ヴェルディ作曲「レクイエム」(新宿文化センター大ホール, 2006年12月) 東京室内歌劇場第111回定期公演モーツァルト作曲《コジ・ファン・トゥッテ》(めぐろパーシモンホール(大ホール), 2005年12月)
佐々木典子	声楽	准教授	オペラ「ダフネ」(東京文化会館, 2007年2月) オペラ「鳴神」(新国立劇場, 2004年1月)
多田羅迪夫	声楽	教授	A.ツェムリンスキー: オペラ《フィレンツェの悲劇》シモーネ役(新国立劇場中ホール, 2005年7月) R.ワグナー: 楽劇《さまよえるオランダ人》オランダ人役(東京文化会館大ホール, 2005年11月)
寺谷千枝子	声楽	教授	大阪フィル定期演奏会「ペレアスとメリザンド」(大阪サ・シンフォニーホール, 2006年5月) 東フィル定期演奏会 ベルリオーズ「ロメオとジュリエット」(サントリー, 川崎ミュージア, オーチャード, 2006年7月)
福島明也	声楽	准教授	モーツァルト「魔笛」ザラストロ 弁者(京都府京都会館, 2006年2月) ブラームス「ドイツ・レクイエム」バリトン・ソロ(神奈川県 みなとみらいコンサートホール, 2007年1月)
直野資	声楽	教授	オペラ『椿姫』ジェルモン(二期会, 2005年6月) オペラ『ジャンニ・スキッキ』タイトルロール(2005年7月)
永井和子	声楽	教授	「ブッチーニのタベ」フィリピン・日本国交記念演奏会(Tanghalang Nicanor Abelardo Cultural of the Philippines, 2006年7月) 「成人の日コンサート2007」音楽物語「蝶々夫人」(サントリーホール, 2007年1月)
吉田浩之	声楽	准教授	吉田浩之プロデュース・オペラ「ツガの魔笛」(タミーノ役・企画・演出)(敦賀市民文化センター, 2006年11月) 新国立劇場オペラ公演 ワグナー作曲「ニュルンベルクのマイスタージンガー」(ダーヴィッド役)(新国立劇場オペラ劇場, 2005年9月~10月(7回公演))
直井研二	声楽	助教	日豪交流30周年記念 平井秀明作曲 オペラ「かぐや姫」(演出)(オーストラリア国立大学 ANU 音楽ホール, 2006年6月) オペラ彩 第23回定期公演 G.ブッチーニ作曲「トゥーランドット」(演出)(和光市民文化センター大ホール, 2007年1月)

東京芸術大学音楽学部・音楽研究科 分析項目 I

青柳晋	器楽・ピアノ	准教授	自主企画リサイタルシリーズ「リストのいる部屋」vol.1&2(トッパンホール,2006年5月,2007年11月) シヨパンエチュード作品 10&25 全曲演奏会(神戸新聞松方ホール,2007年12月)
東誠三	器楽・ピアノ	准教授	東誠三リサイタル(紀尾井ホール,2005年12月)(NHKで放映)
植田克己	器楽・ピアノ	教授	「植田克己ベートヴェンシリーズ」(1986年～2005年まで全27回の最終回,東京文化会館,2005年6月)
角野裕	器楽・ピアノ	教授	ピアノリサイタル(愛知県緑音楽祭,2006年2月) ピアノデュオ公開講座(日立市シビックセンター,2004年11月,2005年9月,2006年10月)
粕谷美智子	器楽・ピアノ	教授	多美智子室内楽シリーズ X(東京文化会館,2004年4月) 多美智子室内楽シリーズ XI(東京文化会館,2006年11月)
北川暁子	器楽・ピアノ	教授	R.シューマン没後150年 北川暁子ピアノリサイタル第1夜(2006年4月,東京文化会館),第2夜(2006年8月,東京オペラシティ),第3夜(2006年12月,東京オペラシティ)
迫昭嘉	器楽・ピアノ	准教授	カザルスホールリサイタルシリーズ全4回(カザルスホール,2005年12月/2006年3月/12月/2007年4月) モーツァルトコンサートシリーズ(名古屋フィルハーモニー交響楽団)(愛知県芸術劇場,2007年3月)
伊藤恵	器楽・ピアノ	准教授	ロベルト・シューマン没後150年記念プロジェクト 伊藤恵のリサイタル3回シリーズ(神戸新聞松方ホール 2006年3月,5月,7月) シューマニアーナXII, XIII(録音:2007年1月,4月,神戸新聞松方ホール)
有森博	器楽科・ピアノ	准教授	小澤征爾指揮サイトウ・キネン・オーケストラ ヨーロッパ公演参加(ヴァレンシア,ベルリン,ウィーン,パリ,ロンドン,ミラノ,2004年5月) 小林研一郎指揮日本フィルハーモニー交響楽団九州公演に同行(長崎ブリックホール,熊本県立劇場, iichiko 総合文化センター,2007年2月)
渡邊健二	器楽科・ピアノ	教授	自主企画リサイタルシリーズ(東京文化会館,2004年6月,2005年6月,2006年6月)
廣江理枝	器楽・オルガン	准教授	オルガンジルバスターコンサート(ドイツ・ニュルテインゲン市教会,2005年12月) オルガンリサイタル(リトアニア・リガ・聖ヨハネ教会,2004年7月)
浦川宜也	器楽・弦楽	教授	ロシア音楽とオーストリア古典(東京,大阪,札幌,2006年10月) ブラームス ヴァイオリンソナタ(東京,大阪,2006年1月)
漆原朝子	器楽・弦楽	准教授	ブラームス:ヴァイオリンとピアノのための作品全曲演奏会(ライブレコーディング実施)(神戸新聞松方ホール,2004年6月) NHK交響楽団 指揮=ベルンハルト・クレーとの共演,ワルシャワ・フィル定期(2004年8月,12月)
山崎伸子	器楽・弦楽	准教授	芥川也寸志 チェロコンチェルト「オスティナート」都響第621回定期(東京文化会館,2006年1月) リサイタル(紀尾井ホール,2004年5月)
川崎和憲	器楽・弦楽	准教授	エレオノーレ弦楽四重奏団後期ベートーヴェン・シューベルトシリーズ第2～6回演奏会(津田ホール,2004年～2006年) エレオノーレ弦楽四重奏団ヨーロッパ演奏(ライブツィヒ,ボン,ウィーン,他,2006年4月～5月)
河野文昭	器楽・弦楽	教授	ゆふいん音楽祭出演(大分県湯布市,2004.05.06.07) アンサンブル of トウキョウ 定期演奏会出演(年4回)(東京文化会館,2004～07)
澤和樹	器楽・弦楽	教授	澤和樹/蓼沼恵美子デュオ結成30周年「ベートーヴェン:ソナタ全曲演奏会」(東京(Hakuju Hall),大阪(モーツァルトサロン),英国湖水地方音楽祭,2006年7月～10月) 澤クアルテット定期演奏会(東京(Hakuju Hall),福岡(あいにふホール)他,2006年6月)
清水高師	器楽・弦楽	教授	2006 カザフスタン(リサイタル)(アスタナ,2006.11月) 2005 リサイタル(王子ホール,2005 11月)
永島義男	器楽・弦楽	教授	宮崎国際音楽祭(宮崎県立芸術劇場,'04'05'06'07(5月)) 永島義男コントラバス・リサイタル(東京文化会館,2006年11月)
松原勝也	器楽・弦楽	准教授	武満徹 Visions in Time 武満徹トリビュート・コンサート《SOUL TAKEMITSU》(東京オペラシティ,2006年6月) ジュニアフィルハーモニックオーケストラ・サマーコンサート ジュニアフィルハーモニックオーケストラ・オータムコンサート(指揮・独奏)(2005年)
鈴木雅明	器楽・古楽	教授	バッハ・コレギウム・ジャパン(BCJ)定期演奏会(年4回) バッハ・コレギウム・ジャパン モーツァルト《レクイエム》(2006年12月,彩の国さいたま芸術劇場)

東京芸術大学音楽学部・音楽研究科 分析項目 I

野々下由香里	器楽・古楽	准教授	ハイドン《月の世界》クラリーチェ役（北とびあ,2006年12月） ヘンデル作曲オラトリオ《ヘラクレスの選択》快樂役 ヘンデルフェスティバル(浜離宮朝日ホール,2006年1月)
岡山潔	器楽・室内楽	教授	エレオノーレ弦楽四重奏団ヨーロッパ公演(ライブツィヒ, ボン, シュトゥットガルト, アールンスベルク, ウィーン,2005年12月) 神戸市室内合奏団定期演奏会 (ヴァイオリン独奏)(神戸市文化ホール,2006年5月)
金昌国	器楽・木管	教授	アンサンブル of トウキョウ定期演奏会(東京文化会館 他,2004-2007) さいたまアンサンブル定期演奏会(埼玉県立劇場 他,2004-2007)
小畑善昭	器楽・木管	准教授	オーボエの新しい響き III~第8回国際オーボエコンクール・軽井沢 審査委員によるコンサート~(軽井沢大賀ホール, 2006年10月)
山本正治	器楽・管打楽	准教授	木曾音楽祭(木曾文化公園文化ホール,2004年, 2005年, 2006年) Classicを遊ぼう(稲沢市民会館中ホール, 2005年1月/ 2006年1月)
稲川榮一	器楽・金管	教授	作曲グループ「甲」早川和子作品チューバソロ「薔」を演奏(音楽の友ホール,2005年5月) ロニー金管五重奏団コンサート(川口リリア音楽ホール,2005年12月)
杉木峯夫	器楽・金管	教授	トランペット・リサイタル(山形市, 川西町, 北京市,2005年6月, 2006年11月, 1月) 東京オペラ森(上野文化会館,2005年3月)
守山光三	器楽・金管	教授	日・独・墺国際交流演奏会(オーストリア・ウィーン市,2007年4月) 草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティバル(群馬県草津町,毎年8月)
藤本隆文	器楽・打楽器	准教授	チェンバロ+パーカッション/ローラン テッシュネ・藤本隆文(東京文化会館,2006年12月) 藤本隆文 パーカッション リサイタル(東京文化会館,2005年6月)
小林研一郎	指揮	教授	NHK交響楽団演奏会(指揮)(東京文化会館,2007年4月) ブタペストフィルハーモニーオーケストラ演奏会(指揮)(ハンガリー国立歌劇場, 2007年5月)
藤原睦子	邦楽・三味線音楽	教授	花の友(光響会)(千葉社会教育会館,2005年) 晴天の鶴(日本の響)(紀尾井ホール,2005年)
浅見文子	邦楽・長唄	准教授	NHK録音 角兵衛(2004/5) 神田祭・東山(2005/6) 阿国歌舞伎(2005/8)娘道成寺(2006/3) 秋色種(2006/8) 藤娘・傀儡師(2007/4) (NHKスタジオにて) 新作「陰陽師」 節付け 録音(2005年)
大橋萬寿子(花柳寿美)	邦楽・日本舞踊	准教授	第85回 曙会(花柳寿美リサイタル)(国立劇場大劇場,2007年2月) 第18回交流舞台 宋和映風氏, 花柳寿美ジョイントリサイタル(韓国芸術大学内劇場, (ソウル)国立国学院,2005年)
関根知孝	邦楽・能楽	准教授	能「道成寺 赤頭」の披演(独立25周年記念能)(観世能楽堂,2007年7月) 能「望月」の披演(観世会別会)(観世能楽堂,2007年4月)
武田孝史	邦楽・能楽	教授	能「杜若 沢辺の舞」シテ(主演)(宝生能楽) 能「鞍馬天狗」シテ(主演)(セルリアンタワー能楽堂)
三浦正義	邦楽・邦楽囃子	教授	新春を彩る長唄の世界(ハーモニーホールふくい) 長唄協会演奏会(国立大劇場,毎年)
安藤政輝	邦楽・箏曲	教授	アジアの絃の音(韓国ソウル市 国立劇場他, 2006年11月) 北とびあ国際音楽祭参加「第21回安藤政輝 箏リサイタル」(北とびあつつじホール, 2006年11月)
萩岡松韻	邦楽・箏曲	准教授	第三回 萩岡松韻りさいたる(国立劇場小劇場, 2005年10月) 光彩時空(東京国立博物館,2006年10月)
TEYCHENE Y, Laurent	音楽学・ソルフェージュ	准教授	チェンバロ+パーカッション III(東京文化会館,2006年) 日本音楽集団第176回定期演奏会(津田ホール,2004年)
林達也	音楽学・ソルフェージュ	准教授	100年前のフォーレとその周辺 -日本フォーレ協会第17回演奏会-(東京文化会館,2006年6月) 林達也 ピアノ・リサイタル(すみだトリフォニーホール,2007年1月)
船山隆	音楽学・音楽学	教授	サントリー音楽財団サマーフェスティバル 2006「あるパトロン肖像〜パウル・ザッハー生誕100年記念」共同企画・構成(サントリーホール,2006年8月) サントリー音楽財団サマーフェスティバル 2005「20世紀のウィーン」共同企画・構成(サントリーホール,2005年8月)
市村作知雄	音楽環境創造	准教授	東京国際芸術祭 2007(にしすがも創造舎等,2007年2月-3月) 東京国際芸術祭 2005(東京芸術劇場等,2005年2月-3月)
熊倉純子	音楽環境創造	准教授	取手アートプロジェクト(企画等)(取手市内各所,2004年12月, 2005年11月, 2006年11月)

西岡龍彦	音楽環境創造	教授	Fl.とMba.のための「シャガールの絵による3つの小品」(アニヴェルセル表参道,2007年4月). Fl.独奏のための「Pavana」(アニヴェルセル表参道,2006年12月)
玉井菜採	演奏芸術センター	准教授	玉井菜採 ヴァイオリンリサイタル(3回シリーズ)京都府民ホールアルティール(2004年6月-2008年10月) 玉井菜採 ヴァイオリンリサイタル(東京文化会館,2008年10月)
大石泰	演奏芸術センター	准教授	ふれく愛>コンサート(昭和女子大学人見記念講堂,2005年6月) JASRAC カジュアル・ゼミナール「成長と復興の流れの中で」(調布グリーンホール,2006年3月)
松下功	演奏芸術センター	教授	2尺八とチャイニーズ・オーケストラのための協奏曲「天空の舞」(作曲指揮)(シンガポール・コンベンションホール,2007年6月) 邦楽合奏と管弦楽のための「誘いの舞」(作曲指揮)(長野県民文化会館大ホール,2006年11月)

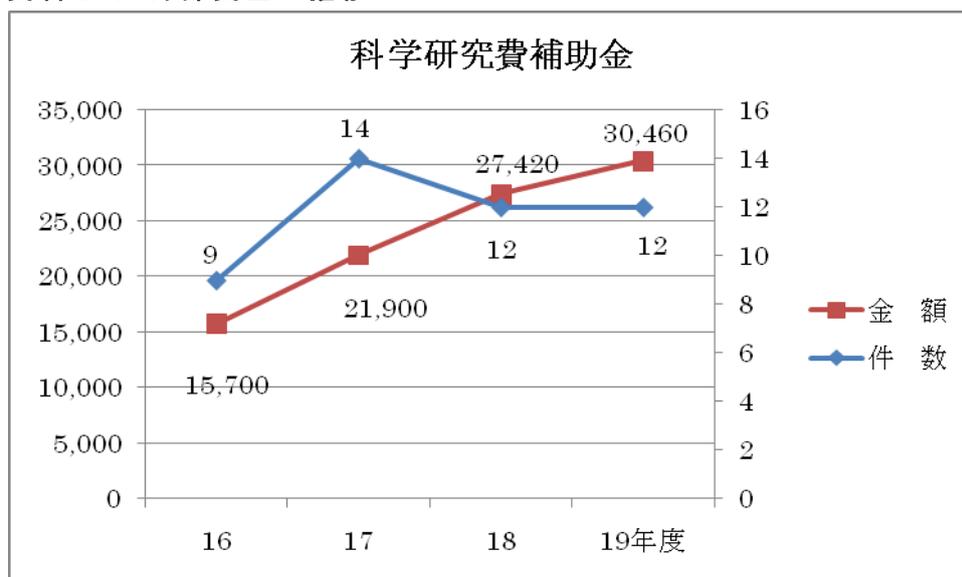
(2) 分析項目の水準及びその判断理由

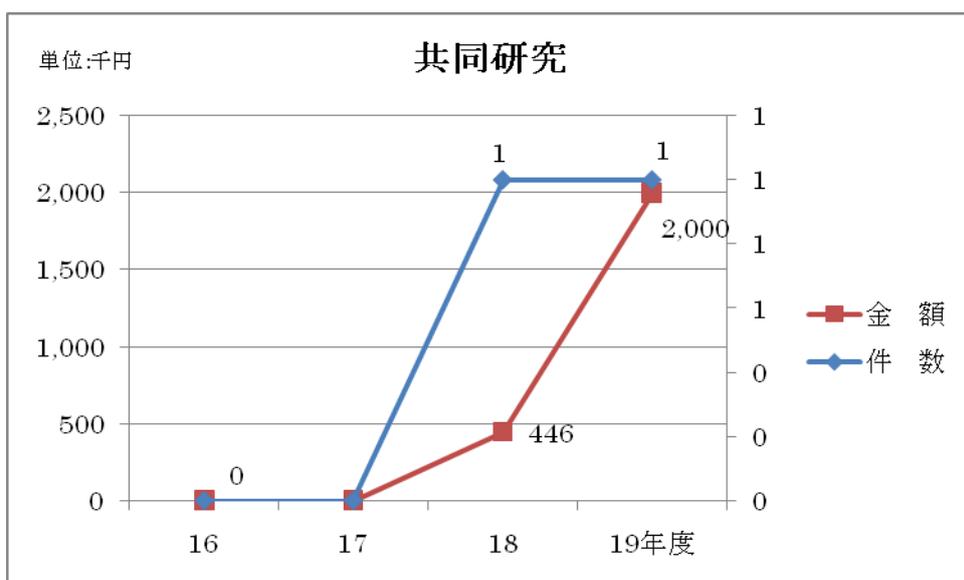
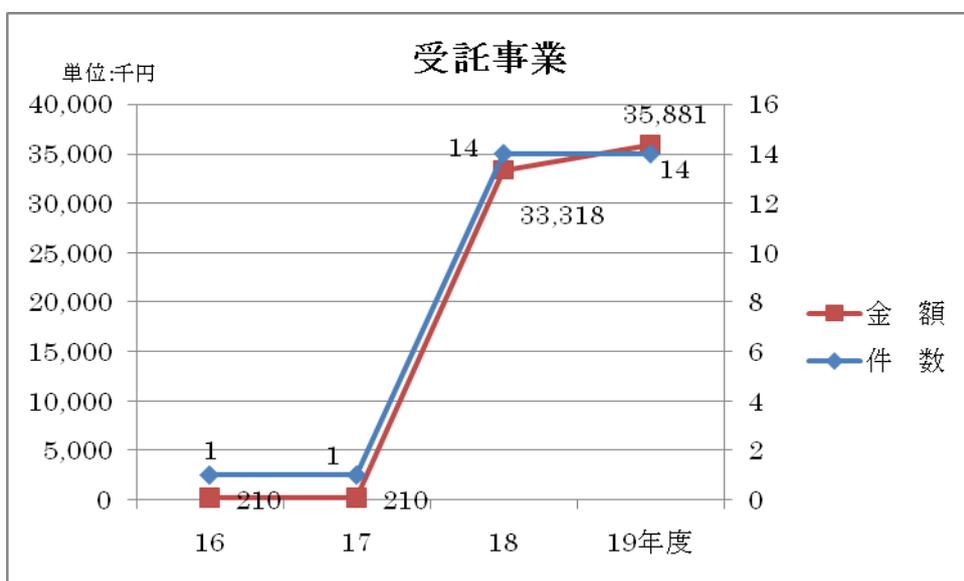
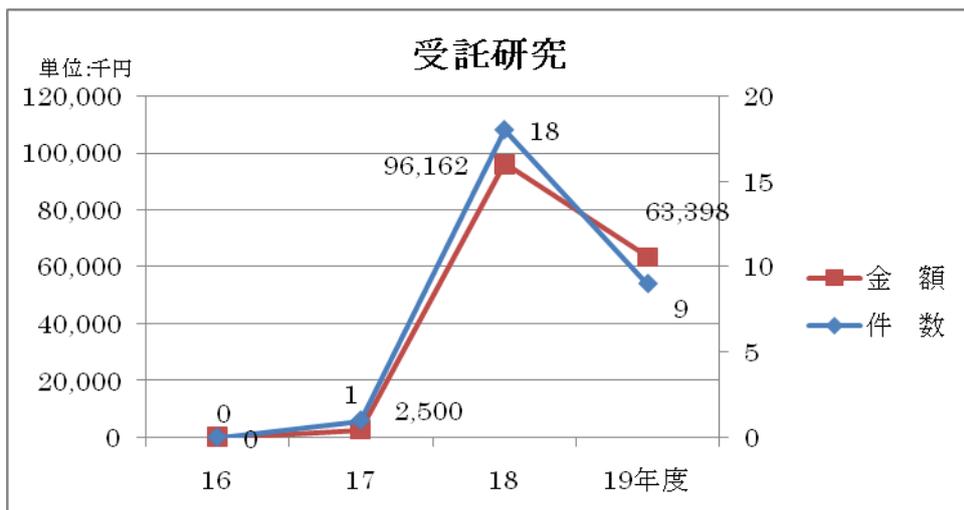
(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由)

資料 2-3 (P. 2-6) に示したように、本中期目標期間における演奏会等の開催数は、教員一人あたり 30 件を超える非常に高い水準にある。これに対して、著書・論文は一人あたり 2.38 本とやや少なめだが、演奏を研究活動の中心とする教員の割合が全教員の約 3 分の 2 を占めることをふまえれば、著書・論文をふくめた各教員の創作・演奏・研究活動は全体としてきわめて活発に行われているといえる。科学研究費補助金の採択数も、この間、着実に伸びを示しており、平成 20 年度に、分科「芸術学」中に初めて細目「芸術学・芸術史・芸術一般」が設定されるまで、音楽や音楽学を含む関連細目が存在しなかったことを考慮すれば、規模に対して高い水準を保ってきたと言える。また、新たな細目が加わったことで演奏中心に活動してきた教員の間でも研究費獲得に対する意欲が高まり、平成 20 年度には科学研究費補助金の申請数がこれまでにない大幅な伸びを示した。受託研究や寄付金についても、千住校地を開設した平成 18 年度から増えている(資料 2-5, 2-6, 2-7 参照)。

資料 2-5 外部資金の推移





資料 2-6 平成 16～19 年度科学研究費補助金交付課題一覧 ※職名は新規採択時

研究種目	研究代表者 職 氏名			研究課題
基盤研究 (B)	音楽学部	教授	土田 英三郎	貴重音響資料デジタル化の試み
基盤研究 (B)	音楽学部	准教授	大角 欣矢	近代日本における音楽専門教育の成立と展開
基盤研究 (B)	音楽学部	准教授	植村 幸生	芸術系大学における楽器資料の教育資源化
基盤研究 (C)	音楽学部	教授	枝川 明敬	文化活動が地域の経済的な活性化に及ぼす影響及びその方策に関する研究
基盤研究 (C)	音楽学部	准教授	杉本 和寛	西沢一風を中心とする、近世前期出版界における作家・作品・書肆の関係性に関する研究
基盤研究 (C)	音楽学部	非常勤講師	尾高 暁子	中華民国期上海のアマチュア組織活動と音楽消費の実態——国楽生成に焦点をあてて
萌芽研究	音楽学部	准教授	山下 薫子	音・音楽環境と音楽的イメージの発達と関連に関する国際比較
若手研究 (B)	音楽学部	助教	遠藤 衣穂	15世紀初期における多声ミサ曲の研究
若手研究 (B)	音楽学部	講師	丸井 淳史	ヘッドホンによるサラウンド音楽再生のための仮想空間の開発
若手研究 (B)	音楽学部	助教	磯部 美和	子供の言語獲得における韻律情報の役割—日本語・英語のあいまい文を通して
基盤研究 (C)	音楽学部	教授	佐野 靖	芸術表現教育に関する基礎的研究: 幼・小・中の系統的音楽学習プログラムの開発
基盤研究 (C)	音楽学部	助教授	塚原 康子	近代日本の音楽家に関する研究
基盤研究 (C)	音楽学部	教授	山本 文茂	日本の音楽教育学の再構築に関する基礎的研究
基盤研究 (B)	音楽学部	教授	土田 英三郎	サウンド・アーカイヴの構築に向けての研究
基盤研究 (B)	音楽学部	教授	柘植 元一	近現代アジア・オリエント文化圏における音楽伝統の継承と変容

資料 2-7 平成 16～19 年度受託研究・共同研究・受託事業の主な受入課題

種別	研究題目	相手先
共同研究	次世代サラウンド再生の研究	パイオニア株式会社 技術戦略部
共同研究	ピアノアクションの演奏性についての研究	株式会社河合楽器製作所
受託研究	足立区における多層的な文化芸術環境の創造に関する調査研究	足立区教育委員会
受託研究	台東区芸術支援施設の運営モデルに関する研究	台東区
受託研究	店舗空間における音楽とその音響効果に関する研究	株式会社ハーフノート
受託研究	「日本の伝統・文化」の副教材の研究・開発委託	東京都教育委員会
受託研究	区民への文化芸術に関する影響度等の調査研究委託	足立区教育委員会
受託研究	野外空間における舞台芸術の研究—発光する舞台を用いた現代能の創造—	東京ガス豊洲開発株式会社
受託研究	都立高等学校における学校設定教科・科目「日本の伝統・文化（仮称）」のカリキュラムの研究開発委託	東京都教育委員会
受託事業	「埼玉大学 大学歌」及び「埼玉大学祝典序曲」の録音原盤制作	埼玉大学
受託事業	東京藝大フィルハーモニア演奏会	三市合同文化事業実行委員会
受託事業	文化庁平成 18 年度人材育成支援事業「芸術系大学等教育機関」（調査研究・伝統芸能等分野）による委嘱事業「芸能を中心とする無形の文化財の保護に関わる資料の体系的収集と整備」	文化庁長官

東京芸術大学音楽学部・音楽研究科 分析項目 I

受託事業	文化庁平成 18 年度人材育成支援事業「芸術系大学等教育機関」(人材育成・普及活動・音楽分野)による委嘱事業「大学院生を主体としたフランス語オペラの制作・発表」	文化庁長官
受託事業	文化庁平成 18 年度人材育成支援事業「芸術系大学等教育機関」(人材育成・普及活動・音楽分野)による委嘱事業「学生による邦楽ワークショップ」	文化庁長官
受託事業	文化庁平成 18 年度人材育成支援事業「芸術系大学等教育機関」(人材育成・普及活動・音楽分野)による委嘱事業「日本の『うた』を考える—シンポジウム・ワークショップ・コンサート」	文化庁長官
受託事業	北とぴあ国際音楽祭 2007「藝大と遊ぼう in 北とぴあ」	(財)北区文化振興財団
受託事業	北とぴあ国際音楽祭 2006「芸大とあそぼう in 北とぴあ」	(財)北区文化振興財団
受託事業	ジャン＝マルク・ルイサダ氏(ピアニスト)と東京芸術大学学生によるオーケストラの共演	株式会社東京アイエムシー
受託事業	メンデルスゾーン基金チャリティ・ガラ・コンサート	株式会社梶本音楽事務所
受託事業	LEXUS Concert in 東京藝大'07—ウィーンの響き—	東京トヨペット株式会社
受託事業	「LEXUS コンサート in 東京藝大'06—ハッピーバースデー・ベートーヴェン—」	東京トヨペット株式会社
受託事業	豊洲プロジェクト『蒼楽』	東京ガス豊洲開発株式会社

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 研究成果の状況

(観点に係る状況)

前項で述べたように、本学部・研究科の教員による演奏会等の開催数は一人あたり 30 件を越え、学内外できわめて活発な研究成果の発信が行われている(資料 2-3(P. 2-6)参照)。しかしながら、研究業績説明書では、あくまでも本学部・研究科等が組織として取り組んだものに焦点をあて、各教員が専門・関心に応じて学外で行っている演奏活動はあえて積極的に取り上げなかった。これは、音楽という芸術領域を専門とする本学部・研究科において、教員個々人が選び取る自由な創作・演奏活動が尊重されるべきことを重視した上で、本学部・研究科の研究成果としては多様な専門・指向性をもつ教員同士の協働から生まれる学内の特色ある活動を優先したために他ならない。ただし、たとえばシューマンの全曲演奏等で話題を呼んだ伊藤恵准教授、バッハ・コレギウム・ジャパンを率い世界的な演奏・録音活動を続けている鈴木雅明教授、国内外での精力的な指揮活動で著名な小林研一郎教授をはじめ、卓越した音楽家として国内外で高い評価を得ている教員は非常に多い(資料 2-4(P. 2-6～2-9)参照)。

こうした優れた音楽家集団でもある本学部・研究科の教員同士の取り組み(資料 2-8 参照)から、たとえば森鷗外訳によるオペラ「オルフェウス」上演(研究業績説明書 27-02-1010 参照)、明治 31 年(1898)の東京音楽学校第一回定期演奏会の再現コンサート(研究業績説明書 27-02-1011 参照)、坪内逍遙の「新曲『浦島』」全幕上演をふくむ邦楽アンサンブルによる新たな舞台芸術作品創造「和楽の美」シリーズ(研究業績説明書 27-02-1009 参照)、といった本学の歴史的蓄積を活かした公演が生まれた。これらは、公演の DVD 制作・販売や新聞・テレビ番組での紹介も行われるなど、社会的にも高い関心と評価を得ている。また、作曲家シリーズ等(研究業績説明書 27-02-1004～1008 参照)において、レクチャーやプレトークを交えて、全曲演奏や演奏機会の少ない稀曲の発掘などに取り組む姿勢も、本学部・研究科でしかなしえないユニークな研究型の演奏発信活動として評価されている。

このほか、音楽による地域貢献、アジアの音楽文化研究の拠点形成、音楽・音響にかかわる新たな手法の研究、などにおいても、「学部・研究科を代表する優れた研究業績リスト」及び「研究業績説明書」で示したように、創作・演奏・研究の成果が国内外の機関や各種学会等から高い評価を受けている。また、本学における研究成果は各種報道媒体に取り上げられる回数も多く(別添資料 2-①(P. 2-19～2-21)参照)、社会からの関心と要請に確実に応えているといえる。

資料 2-8 演奏芸術センター企画演奏会

※奏楽堂プロジェクトとして① 藝大の響き：音楽学部各講座の枠を越えたインタラクティブな試み、② 奏楽堂シリーズ：音楽学部各講座の専門性、独自性を活かしたコンサートシリーズ、③ 藝大 21：広いパースペクティブで「今」という時代を見つめる企画)として企画内容を分けて、本学の特色を活かした他の演奏団体ではできない各種の企画を展開している。

※①～③に該当しない通常の定期演奏会は掲載していない。

※備考欄に特に表示のない場合は、会場は本学奏楽堂。

No	種類	演奏会名	年月日		入場者数	備考
1	①	藝大ドヴォルザーク・プロジェクトⅠ 世界のマエストロを迎えて 第3回 クルト・マズア	H16.5.1	土	1,077	
2	①	藝大ドヴォルザーク・プロジェクトⅡ～レクチャー・コンサート第1回～	H16.5.22	土	374	
3	①	藝大ドヴォルザーク・プロジェクトⅢ～レクチャー・コンサート第2回～	H16.5.29	土	391	
4	①	藝大ドヴォルザーク・プロジェクトⅣ～レクチャー・コンサート第3回～	H16.6.5	土	403	

東京芸術大学音楽学部・音楽研究科 分析項目Ⅱ

5	①	藝大ドヴォルザーク・プロジェクトV ～レクチャー・コンサート第4回～	H16.6.12	土	450	
6	①	藝大ドヴォルザーク・プロジェクトVI ～レクチャー・コンサート第5回～	H16.6.19	土	384	
7	①	藝大ドヴォルザーク・プロジェクトVII ～藝大定期オーケストラ第309回～ 藝大フィルハーモニア定期演奏会	H16.6.25	金	988	
8	①	藝大ドヴォルザーク・プロジェクトVIII ～東京藝大チェンバーオーケストラ第3回定期演奏会～	H16.6.26	土	292	
9	①+②	藝大ドヴォルザーク・プロジェクトIX 管楽器シリーズI ～チェコ音楽の魅力～	H16.7.11	日	530	
10	①	藝大ドヴォルザーク・プロジェクトX 藝大定期オーケストラ第310回 藝大フィルハーモニア定期演奏会	H16.10.23	土	647	
11	①	藝大ドヴォルザーク・プロジェクトX I 藝大定期オーケストラ第311回 藝大フィルハーモニア定期演奏会(合唱)	H16.11.19	金	679	
12	①+②	藝大ドヴォルザーク・プロジェクトX II “うた”シリーズIV-3 ドヴォルザークの独唱曲と重唱曲を集めて	H16.12.12	日	280	
13	①	ラヴェル・プロジェクト 第1回 「声楽と2台ピアノの夕べ」 [レクチャー&コンサート1]	H17.5.21	土	664	
14	①	ラヴェル・プロジェクト 第2回 「ピアノ全曲演奏会」 [レクチャー&コンサート2]	H17.5.28	土	981	
15	①	ラヴェル・プロジェクト 第3回 「室内楽全曲演奏会」 [レクチャー&コンサート3]	H17.6.11	土	738	
16	①	ラヴェル・プロジェクト 第4回 「ラヴェルとその周辺」 [レクチャー&コンサート4]	H17.6.18	土	502	
17	①	ラヴェル・プロジェクト 第5回 藝大フィルハーモニア定期第314回 オール・ラヴェル・プログラム	H17.6.24	金	915	
18	①+②	ラヴェル・プロジェクト 第6回 “うた”シリーズV-1 オペラの夕べ	H17.6.28	火	984	
19	①	「シューマン・プロジェクト第1回」 レクチャー&コンサート1	H18.5.20	土	378	
20	①	「シューマン・プロジェクト第2回」 レクチャー&コンサート2	H18.5.27	土	309	
21	①	「シューマン・プロジェクト第3回」 レクチャー&コンサート3	H18.6.10	土	503	
22	①	「シューマン・プロジェクト第4回」 レクチャー&コンサート4	H18.6.17	土	505	
23	①	「シューマン・プロジェクト第5回」 藝大フィルハーモニア定期第319回	H18.6.23	金	752	
24	①+②	「シューマン・プロジェクト第6回」 上野の森オルガンシリーズ	H18.6.24	土	265	
25	①+②	「シューマン・プロジェクト第7回」 うたシリーズVI-1	H18.6.27	火	897	
26	①	「シューマン・プロジェクト第8回」 藝大フィルハーモニア・合唱定期第321回	H18.11.17	金	646	
27	①	学内演奏会(オーケストラ)グリーク&シベリウス・プロジェクト 第1回	H19.4.27	金	600	
28	①	グリーク&シベリウス・プロジェクト 第2回 レクチャー&コンサート1	H19.5.12	土	362	
29	①	グリーク&シベリウス・プロジェクト 第3回 レクチャー&コンサート2	H19.5.19	土	302	
30	①	グリーク&シベリウス・プロジェクト 第4回 レクチャー&コンサート3	H19.5.26	土	222	
31	①	藝大フィルハーモニア定期 グリーク:劇音楽「ペールギュント」(全曲)	H19.6.8	金	799	
32	①	藝大フィルハーモニア定期 グリーク:劇音楽「ペールギュント」(全曲)	H19.6.8	金	950	

東京芸術大学音楽学部・音楽研究科 分析項目Ⅱ

33	①	グリーグ&シベリウス・プロジェクト 第6回 レクチャー&コンサート4	H19.6.9	土	301	
34	①	グリーグ&シベリウス・プロジェクト 第7回 藝大フィルハーモニア定期演奏会	H19.10.25	木	576	
35	①	グリーグ&シベリウス・プロジェクト 第8回 弦楽シリーズ〜ドレスデン・シュターツカペレ弦楽器奏者と共に	H19.11.27	火	395	
36	①	上野の春〜藝大教官演奏会〜第3回	H17.3.13	日	606	
37	②	“うた”シリーズⅣ-1 イタリアオペラ・ガラコンサート〜ベルカントからヴェリズモへの流れのなかで〜	H16.6.29	火	913	
38	②	“うた”シリーズⅣ-2 ～名曲でたどるパノラマ・フランス歌曲～	H16.11.20	土	678	
39	②	うたシリーズⅤ-2 森鷗外訳オペラ「オルフェウス」	H17.9.18	日	1,039	
40	②	うたシリーズⅤ-2 森鷗外訳オペラ「オルフェウス」	H17.9.19	月	1,023	
41	②	うたシリーズⅤ-3 ドイツリートの日 ～ブラームスからウルマンまで～	H17.12.3	土	558	
42	②	うたシリーズⅥ-2 イタリア近代歌曲の展望	H18.9.16	土	404	
43	②	うたシリーズⅥ-3 英米歌曲を中心として	H18.12.2	土	340	
44	②	うたシリーズⅦ-2 日本・中国歌の饗宴	H19.9.3	月	506	
45	②	ハイドン・シリーズ第1夜 ハイドン弦楽四重奏曲全曲演奏その6	H16.11.4	木	371	
46	②	ハイドン・シリーズ第2夜 室内オーケストラ演奏会	H16.11.5	金	485	
47	②	ハイドン・シリーズ第1夜 室内オーケストラ演奏会	H17.11.2	水	481	
48	②	ハイドン・シリーズ第2夜 ハイドン弦楽四重奏曲全曲演奏その7	H17.11.4	金	412	
49	②	ハイドン・シリーズ第1夜 オーケストラ演奏会	H18.11.2	木	187	
50	②	ハイドン・シリーズ第2夜 弦楽四重奏曲演奏シリーズ その8	H18.11.4	土	237	
51	②	ハイドン・シリーズ第1夜 オーケストラ演奏会	H19.11.1	木	337	
52	②	ハイドン・シリーズ第2夜 弦楽四重奏曲全曲演奏シリーズその9	H19.11.3	土	286	
53	②	管楽器シリーズ モーツァルトの管楽器曲を集めて	H17.7.9	土	400	
54	②	管楽器シリーズ ～藝大ブラスの歴史をふり返って～	H17.2.13	日	707	
55	②	管打楽器シリーズ アンドレ・ジョリヴェとその周辺	H18.2.19	日	546	
56	②	管打楽器シリーズ モーツァルト協奏曲のひとつとき(レクチャーあり)	H18.7.8	土	564	
57	②	管打楽器シリーズ Saxophone Day	H19.2.18	日	769	
58	②	管打楽器シリーズ コンクールの華(モーツァルト管楽シリーズ)	H19.7.14	土	756	
59	②	管打楽器シリーズ～藝大管楽ソロイスト	H20.2.16	土	523	
60	②	弦楽シリーズ 弦楽科教員による「モーツァルトの日」	H18.9.12	火	699	
61	②	上野の森 オルガン・シリーズ ～賛歌の系譜Ⅰ～	H16.6.13	日	531	
62	②	上野の森 オルガン・シリーズ ～賛歌の系譜Ⅱ～	H16.10.31	日	425	

63	②	上野の森オルガンシリーズ 神秘のオルガン音楽 ～スペインの黄金時代～	H17.6.4	土	346	
64	②	上野の森オルガンシリーズ シンフォニックな響き～ ロマン派のオルガン音楽～	H17.10.23	日	403	
65	②	上野の森オルガンシリーズ オルガンとトランペット の響き	H18.10.15	日	347	
66	②	上野の森オルガンシリーズ ブクステフェーデ没後 300年記念 Part1	H19.6.2	土	425	
67	②	上野の森オルガンシリーズ ブクステフェーデ没後 300年記念 Part2	H19.11.17	土	396	
68	②	藝大リサイタルシリーズⅠ-1 伊藤 恵ピアノリサ イタル	H19.9.5	水	498	
69	②	藝大リサイタルシリーズⅠ-2 川崎和憲ヴィオラ・ リサイタル	H19.9.15	土	325	
70	②	藝大リサイタルシリーズⅠ-3 多田羅迪夫バリト ン・リサイタル	H19.9.18	火	444	
71	③	藝大 21 創造の杜 ～ルチアーノ・ベリオ～ オー ケストラ作品	H16.5.27	木	287	
72	③	藝大 21 創造の杜 ～ルチアーノ・ベリオ～セクエ ンツァ完全全曲演奏	H16.5.30	日	432	
73	③	藝大 21 創造の杜 藝大現代音楽の夕べ	H17.11.24	木	498	
74	③	藝大 21 創造の杜 ピエール・ブーレーズ オーケ ストラ作品演奏会	H18.4.21	金	477	
75	③	藝大 21 創造の杜 ピエール・ブーレーズ 室内楽 作品演奏会	H18.4.22	土	437	
76	③	藝大 21 創造の杜 藝大現代音楽の夕べ	H19.4.19	木	289	
77	③	藝大 21 アジア・躍動する音たち～アジアの協奏 曲～	H16.9.16	木	442	
78	③	藝大 21 アジア・躍動する音たち～上海音楽学院 を迎えて～	H17.7.6	水	439	
79	③	藝大 21 アジア・躍動する音たち 韓国・ソリの伝 統と現代の音楽	H18.9.15	金	485	
80	③	藝大 21 アジア・躍動する音たち 日本・中国・韓 国の組歌	H19.6.23	土	336	
81	③	藝大 21 時の響き ジャズ in 藝大	H16.7.17	土	873	
82	③	藝大 21 時の響き JAZZ in 藝大 ～原 信夫とシャープス フラッツ VS Manto Vivo～	H17.7.16	土	992	
83	③	藝大 21 時の響き ジャズ in 藝大 ～宮間利之とニューハードVSマント・ヴィーヴォ	H18.7.15	土	945	
84	③	藝大 21 時の響き ジャズ in 藝大～邦楽転生～	H19.7.21	土	741	
85	③	藝大 21 和楽の美 ～宮沢賢治～	H16.5.7	金	771	
86	③	藝大 21 和楽の美 ～邦楽叙事詩「スサノヲ」～	H17.5.6	金	850	
87	③	藝大 21 和楽の美 邦楽総合アンサンブル「今昔 物語」	H18.5.16	火	637	
88	③	藝大 21 和楽の美 新作「浦島」に基づく邦楽合 奏	H19.9.13	木	941	
89	③	藝大 21 藝大とあそぼう ～ゆかいな動物園～	H16.9.19	日	751	
90	③	藝大 21 藝大とあそぼう ～オーケストラの逆襲～	H17.7.3	日	826	

91	③	藝大 21 藝大とあそぼう マザー・グースVS桃太郎	H18.7.2	日	607	
92	③	藝大 21 藝大とあそぼう チャレンジ→明るい未来	H19.7.8	日	673	
93	③	創立 120 周年記念音楽祭 その時、西洋では！ ～東京音楽学校創立期とその周辺のピアノ作品	H20.1.4	金	301	※旧奏 楽堂
94	③	創立 120 周年記念音楽祭 日本近代音楽史に見 る伝統の響き	H20.1.4	金	817	
95	③	創立 120 周年記念音楽祭 レクチャー&シンポジ ウム「藝大の 120 年～藝大はアメリカの影響から始 まった」	H20.1.5	土	260	※ 5-109
96	③	創立 120 周年記念音楽祭 日本の弦楽教育・草 分けの時代	H20.1.5	土	278	※旧奏 楽堂
97	③	創立 120 周年記念音楽祭 藝大ブラスの醍醐味・ 甦るサウンド	H20.1.5	土	649	
98	③	創立 120 周年記念音楽祭 シンポジウム「日本電 子音楽の創成期～藝大音響研究室の活動～」	H20.1.6	日	156	※ 5-109
99	③	創立 120 周年記念音楽祭 黎明期の日本声楽曲	H20.1.6	日	254	※旧奏 楽堂
100	③	創立 120 周年記念音楽祭 展示&コンサート「日本電子音楽の創成期～藝大音響 研究室の活動～」	H20.1.4～ 6	-	467	※第1 ホール
101	③	創立 120 周年記念音楽祭 オーケストラ・コンサート<藝大120年をふり返って>	H20.1.6	日	1,027	
102	③	「第1回東京音楽学校定期演奏会」再現コンサート	H20.2.20	水	302	※旧奏 楽堂
103	③	「第1回東京音楽学校定期演奏会」再現コンサート	H20.2.21	木	978	

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由)

本学部・研究科は、我が国で最初の音楽専門教育機関として長い歴史をもち、近代日本の音楽文化を牽引する立場を保持してきたため、社会から期待される水準は現在でもきわめて高い。このような状況の中で、個人的な活動では、萩岡松韻教授の平成 16 年度芸術選奨文部科学大臣新人賞(2005 年)、枝川明敬教授の日本地域学会賞(2005 年)、亀川徹准教授の日本プロ音楽録音賞(2004～2006 年)、鈴木雅明教授のドイツ・レコード批評家賞(2005 年)ほか等の受賞があり、期待される水準を上回る卓越性を示した。

大学として取り組んでいる創作・演奏・研究活動については、他に類を見ない企画性の高さと社会的意義およびその優れた成果に対して、学会や音楽界の専門家からも、また社会一般からもいずれも高い評価と大きな反響が寄せられている。

また成果そのものではないが、資料 2-3(P.2-6)に示したように、学外での審議会等の委員就任(コンクール等の審査員をふくむ)が一人あたり 5 件を越えるなど、教員の多くが学外で音楽に関する専門的評価にかかわっていることは本学部・研究科の著しい特色であり、期待されている役割の一端を示している。

Ⅲ 質の向上度の判断

①事例1「外部資金獲得数の増加」(分析項目Ⅰ)

(質の向上があったと判断する取組)

本中期目標期間において、科学研究費補助金をはじめとする研究助成、また受託研究・寄付金などをふくむ外部資金の獲得数が、いずれも着実に増加している。これらは従来に比べて、本学部・研究科における研究活動が拡大していることを明確に示している(資料2-5, 2-6, 2-7(P. 2-9~2-12)参照)。

②事例2「各種企画演奏会の継続的实施」(分析項目Ⅱ)

(高い水準を維持していると判断する取組)

本学の奏楽堂では、音楽学部のオーケストラ、オペラ等の定期公演に加え、演奏芸術センター企画による、①藝大の響き(作曲家プロジェクト及び作曲家シリーズ)、②奏楽堂シリーズ(うたシリーズ、オルガンシリーズ、リサイタルシリーズ等)、③藝大21(時の響き、和楽の美、アジア・躍動する音たち、藝大とあそぼう)の企画を毎年継続して行っている(資料2-8(P. 2-13~2-17)参照)。これらの各種企画は、1)作曲家の全体像を捉える包括的な選曲(ラヴェル、シューマン、ドヴォルザーク、グリーグ、ハイドン等)(研究業績説明書27-02-1004~1008参照)、2)商業ベースに乗らないため演奏されるチャンスの少ない作品の演奏(ベリオ「セクエンツァ」全曲演奏、ラヴェルの舞台作品「スペインの時」「子供と呪文」、シューマンのオペラ「ゲノフェーフア」、舞台演技を付けたグリーグ「ペールギュント」全曲上演)(資料2-8(P. 2-13~2-17)、研究業績説明書27-02-1005~1007参照)、3)啓蒙プログラム(作曲家プロジェクト・シリーズにおけるレクチャー&コンサートや小中学生を対象とした「藝大とあそぼう」)(資料2-8(P. 2-13~2-17)参照)、4)アジアを意識した新しい作品の演奏(アジア・躍動する音たち)(研究業績説明書27-02-1020参照)、5)邦楽アンサンブルを基調とした新しい創造の試み(和楽の美)(研究業績説明書27-02-1009参照)等、芸術大学としての工夫を凝らした企画であり、加えてそれらの企画を単年度の単発的企画ではなく、総体として毎年継続して行っていることは、国立芸術大学としての特色を活かし、その責務を十分に果たす活動である。また、これらのプロジェクトやシリーズは個々の教員の個人的研究活動(資料2-4(P. 2-6~2-9)参照)をベースとして、優れた教育成果を見せている本学学生も交えた本学部・研究科及び演奏芸術センターの総力を挙げた取り組みでもある。この取り組みが、社会的にも注目され、多くのメディアに取り上げられている(別添資料2-①(P. 2-19)参照)ことは、高い水準を維持している証左である。

3. 映像研究科

I	映像研究科の研究目的と特徴	3 - 2
II	分析項目ごとの水準の判断	3 - 4
	分析項目 I 研究活動の状況	3 - 4
	分析項目 II 研究成果の状況	3 - 8
III	質の向上度の判断	3 - 1 1

I 映像研究科の研究目的と特徴

1. 映像研究科における研究活動は、研究科に置く1つの大講座である「映像メディア学講座」（博士後期課程映像メディア学専攻と一致する）ですすめている。その研究スキームの基本的な考え方としては、映像メディア言語を対象として、「メディアを用いたメッセージ表現（メディア技術でものづくり）」という立場から新しい知を創出する拠点となることをめざしている。その研究拠点化の目的には、以下のような社会的かつ学問的な必要性を背景としている。

① 映像メディア学の体系化

映像メディアの特徴は、言葉によるコミュニケーションとは異なった、映像と音響を伴う独自のメッセージ（映像メディア言語）にある。近年はこれにネットワーク等を介したインタラクティブ（相互作用）なコミュニケーションの可能性も重視されている。しかしながら、映像メディア言語の媒介性が日常に及ぼしている影響力がきわめて大きいにも関わらず、映像メディア言語を対象とした研究は、言語学や記号学などと異なり、体系的に研究をおこなう拠点はほとんど整備されていない。その技術動向や市場動向を分析・評価した上でメディア表現をめぐる新しい理論や方法論とその体系化をめざしている。

② 「つくる」という観点を重視した「臨床知」を研究の対象とする理論、技法、教育を包摂する研究方法の確立

「メディアを用いたものづくり」にとってより重要なのは、先端的な技術を表現のなかでどのように位置づけ扱うかという技法と手法の探究である。本研究科修士課程映画専攻およびメディア映像専攻においては、映像コンテンツ創造を中心とした教育研究を行っており、映画製作とさまざまなメディアを対象とした映像メディア作品が、これから2400平米のスタジオで、日々修士課程に在籍する学生の手によって作られるという環境をすでに有する。しかしながら、この創作の現場を観察分析の対象とすると同時に、独自の映像メディア学の体系化という観点から、さまざまな実験的な提案を行い、ユニークなアーカイブの構築、インターネットを用いた配信、独自のメディアデザイン等を通して実践的な研究を深化し、継続的に後継者の育成に従事できる国際的な人材を輩出するためには、学位授与を前提とする教育拠点の整備が必要である。

③ 新しいコンテンツ制作技法とその体系化

インターネット、携帯電話あるいはデジタル放送など情報通信技術を基礎とした携帯端末や情報通信デバイスの普及に加え、2011年地上波デジタル放送など新しい伝送キャリアが提供されることに伴って、映画や放送におけるコンテンツ制作の技法やノウハウはさらに変容することが予想される。各工学関連分野で開発されてきた要素技術が融合しつつあり、既存の技術を機能的に高度化させるのではなく、表現にとって必要な手法との関係の中で技術を洗練化する人材の養成が関連産業の持続的な発展のためにもきわめて重要である。

④ 新しいメディア受容とその伝達方法

新しい映像メディアの登場は日常生活において情報を獲得する方法やメッセージを交換するスタイルが劇的に変化することを意味する。この情報を獲得する方法やメッセージを交換する生活様式の最適化をめざすメディアリテラシーは、個人のメディア利用を問うばかりではなく、個人情報取り扱い（個人情報保護法）や企業におけるメディア利用などコンプライアンス（企業の法令遵守）にも関係する重要な問題である。新しい映像メディアに潜在化している可能性可能性を市場原理として定着させるためには、実験的な表現とそ

の技法を社会のさまざまな局面で顕在化させる場をつくりながら、メディアリテラシーを啓蒙していくことが必要である。

2. 東京芸術大学映像研究科の特徴は、以下の通り。

①本研究科は、平成17年4月に新設の国立唯一の映像教育研究のための大学院組織であり、基礎となる学部を持たない独立研究科である。所在地は、神奈川県横浜市である。平成20年度のアニメーション専攻設置により、教育研究組織が完成する段階にある。映画、アニメーション、メディア表現とそれに関する要素技術など、映像メディア研究に関する技術と表現に関する領域を広くカバーする教員構成となっている(資料3-1参照)。

資料 3-1: 大学院映像研究科の教育研究組織

講座	博士後期課程	修士課程	専門分野		氏名
映像メディア学講座	映像メディア学専攻(H19設置)	映画専攻(H17設置)	監督・脚本・製作領域	監督分野	黒沢 清教授 北野 武特別教授
				脚本分野	筒井ともみ准教授
				製作(プロデュース)分野	堀越謙三教授
			映画制作技術領域	撮影・照明分野	栗田豊通教授
				編集分野	筒井武文准教授
				録音分野	堀内戦治准教授
		メディア映像専攻(H18設置)	コンテンツ創造研究分野	メディアデザイン研究領域	佐藤雅彦教授
				メディアアート研究領域	藤幡正樹教授
			コンテンツ科学研究分野	コンテンツウェア開発研究領域	桐山孝司准教授
				メディア文化財研究領域	桂英史准教授
		コンテンツ産業研究分野(寄附講座)		杉山恒太郎特別教授	
		アニメーション専攻(H20設置:参考)	アニメーション表現研究分野	立体アニメーション領域	伊藤有孝教授(H20着任)
				企画構成領域	岡本美津子教授(H20着任)
			アニメーション創造研究分野	平面アニメーション領域	山村浩二教授(H20着任)
物語構成領域	出口丈人教授				

②本研究科の教員はいずれも「表現」や「製作(制作)」といった「つくる」という視点を重視した研究をおこなっており、教員構成の広範さと柔軟さ、そしてその実績から言って他に類を見ない研究成果のポテンシャルがある。

③設置されて3年という新しい組織であるが、すでに映像研究科内外を横断的につなぐ実践的な活動が開始されている。(※分析項目I参照)

④アニメーション専攻の設置により全領域の教員がそろったこともあり、研究科を超えた有機的な融合による研究共同体の検討も進んでいる。共同的な施設の充実などとあわせてユニークな成果があがることが期待されている。ここでいうユニークな成果とは、既存の映像学や表象研究、あるいは産業分野における映画界やコンテンツ業界への寄与だけでなく、美術における新しい表現ジャンルや国際的かつ先導的なアカデミズムの創出を意味している。

II 分析項目ごとの水準の判断

分析項目 I 研究活動の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 研究活動の実施状況

(観点に係る状況)

1. プロジェクト型研究の確立と推進

映像研究科における映像メディア学は個人作家の資質や才能に依存しただけのスキームだけでなく、プロジェクト型の研究スキームを活用し、そこから作家の資質や才能を発見していくという方法論をもっている点でユニークである。

映画製作や作品制作を主体とした作家主導の研究制作だけでなく、情報(入出力機器、インタフェース開発など)、ヒューマノイドに関する研究、あるいは都市計画などの社会システムに関わる研究、人間の存在と振る舞いを対象とする研究、認知科学や医学・医療との境界領域など、研究対象分野の多様性を考慮した研究プロジェクト編成がすすんでいる。本研究科の研究スキームはプロジェクトごとにチーム編成を研究科内外で横断的に組織化している。

映像研究科設立以来の特筆すべき事項として、本研究科の3件が、新しい分野を切り拓きつつあるメディア芸術というスキームにあってチーム型研究1件、個人研究2件(うち1件は共同研究)が科学技術推進機構戦略的創造研究推進事業 CREST 研究領域「デジタルメディア作品の制作を支援する基盤技術」に採択され、「未来の映画」や「映像表現の新しい可能性」などについて先導的な研究が続けられていることである(資料3-2参照)。

資料3-2 映像研究科 映像メディア学体系化のためのプロジェクト型研究

研究テーマ	研究代表者	概要	備考(外部資金等)
① デジタルメディアをもちいた芸術表現に関する総合的研究	藤幡正樹 教授	デジタルメディアを用いた芸術表現をめぐる理論構築の体系化を目的とし、絵画や写真などの視覚表現技術を対象として、デジタル技術の側面からその作品制作のプロセスに分析を加えるとともに、その新たな発展形を模索し、いままでにない道具とメディアに関する研究開発を行っている。 この研究は科学技術の研究者と芸術表現の思考方法を言語化し、スキーム化する機会を頻繁に設け、創造性についての理解を共有することから積み重ねてきた。これによって、人間にとって根源的な行為のひとつである描画行為に注目し、『『描く』を科学する』というアプローチを見出すことができた。現在、描画を支える表現媒体として、油絵具のデジタル・シミュレータの研究開発(東京工業大学)、描画過程の探究についてロボットを製作して再現し、その過程にある思考の階梯を分析応用する研究(東京大学)、描画行為のモチベーションを子供の行動観察を通して分析する研究(東京芸術大学)などが具体的に順調に進行している。	JST 戦略的創造研究推進事業 CREST チーム型「デジタルメディア作品の制作を支援する基盤技術」
② 映像メディア学における「表現の場」に関する研究	桂 英史 准教授	本研究課題の目的は、地域精神医療におけるコミュニケーション(院外での精神障害者の包括的な治療)の実現をめざして(1)病院外の状況での継続的なワークショップを行うアートプロジェクト型芸術表現を用いて表現形態や表現媒体毎の差異や類同を記述し有効なマイクロエスノグラフィの実現をめざした手法を検討すること、ならびに(2)その手法をコミュニケーションや地域精神医療のガイドライン等重要課題に応用することである。 本研究においては、医療法人・浅井病院(千葉県東金市)をフィールドとして、ワークショップを3年間にわたって、のべ115回実施した。美術のジャンルでは媒体として認知されにくい媒体であっても、場のデザインに応じたプログラムの提示によって良好な結果が得られることを記述した。ワークショップ開催や地域でおこなわれているアートプロジェクトや美術館での展示を通じた成果発表を、科学研究費研究期間終了後も継続している。	科学研究費 基盤B・一般 「地域精神医療と芸術表現に関する総合的研究」 研究期間 平成16-18年度

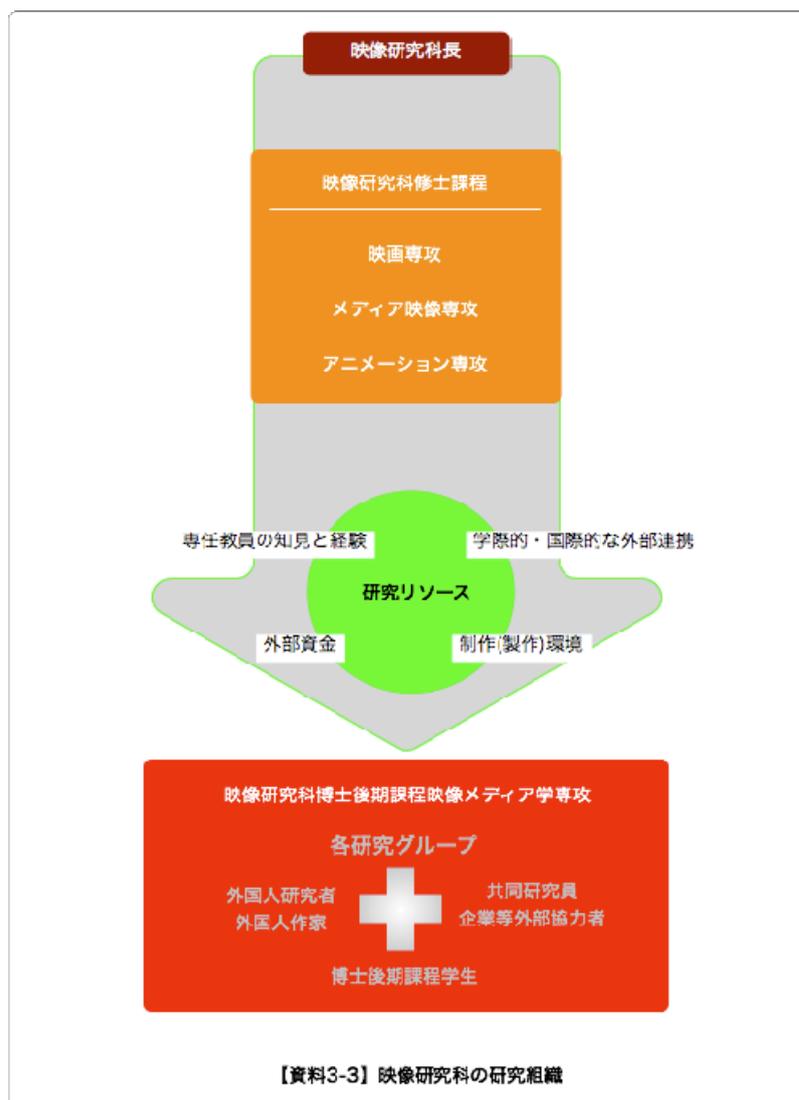
<p>③映像メディアと物語研究 「物語性を重視するデジタルメディアの制作配信基盤」</p>	<p>桐山孝司 准教授</p>	<p>本研究はデジタルメディアによって可能になる物語性の提示の仕方についての研究である。物語性とは従来の小説や映画のような一方法の流れに限定された物語だけでなく、利用者が問いかけたり働きかけたりすることで展開していく探求の可能性を持った性質のコンテンツや体験を指す。そのようなコンテンツを提示する上でのポイントを具体的な事例から抽出し、またそのポイントを利用者に伝えるために必要な基盤技術をXML標準の上で開発する。</p>	<p>JST 戦略的創造研究推進事業さきがけ個人型「デジタルメディア作品の制作を支援する基盤技術」</p>
<p>④表現力拡大を目的とした映像デバイスの開発研究 「全天周と極小領域映像を扱うための入出力機器の研究開発」</p>	<p>桂 英史 准教授</p>	<p>この研究は全天周画像のリアルタイム入出力装置の制作に関して、平成 19 年度までに具体的な設計計画を終え、装置の制作に入っている。設計と製作の段階で、ワークショップや展示などを行いながら、その必要性和先進性について評価を重ねながら研究を進めている。また、極小領域のパンフォーカス高解像度入力装置の開発研究はデータベースでの公開をめざして、データベースの開発とデータの取り込みを行っている。</p>	<p>JST 戦略的創造研究推進事業さきがけ個人型「デジタルメディア作品の制作を支援する基盤技術」での共同研究(共同研究員:橋本典久)</p>
<p>⑤映像メディアの新しい表現形態と「表現の場」をめぐる製作(プロデュース)研究 「ポケット・フィルム・フェスティバル」</p>	<p>藤幡正樹 教授</p>	<p>パリの「フォーラム・ド・イマージュ(Forum des images)」と本研究科の提携にもとづき、映像メディアの新しい表現形態と「表現の場」をめぐる製作(プロデュース)の実践的な研究として、『ポケットフィルム・フェスティバル・イン・ジャパン』を平成 19 年度から開催している。携帯の映像を映画作品としてスクリーンに投影するという、映画祭の形式を継承すると同時にモバイル端末で作品を鑑賞する独自の企画も展開している。民間からの資金提供を受け、広く一般に開かれた映像フェスティバルの形式を取ることによって、新しい表現形態に基づく作品(コンテンツ)と「表現の場」をめぐる基礎的な知見をアーカイブ化し、その成果を教育界や産業界など広く社会に還元するという新しい産学協同のスタイルを確立しつつある。</p>	<p>ソフトバンク、シャープ等</p>

以上のテーマ例のように、多くの芸術分野や社会科学分野と協力関係を維持しながら研究を行い、映像メディアに関する新しい分野の開拓や応用などに関し様々な成果が得られつつある。

2.柔軟な研究組織

メディア技術の影響力が甚大で情報学の重要性が増し、また、アニメーションや漫画の国際的な受容などから示しているように、従来の「芸術諸学」あるいは「美学」といった枠組みの中だけでは解決できない問題も研究の対象となりつつある。このような領域や流通のボーダーレス化の時代を迎え、研究組織もこれに対応したより柔軟な形態が必要となってきている。映像研究科においては、専攻あるいは専門領域横断型の研究組織として、博士後期課程を母体とした映像メディア専攻を母体とした研究組織は、活発な研究推進の方向に向かっていく(資料 3-3 参照)。さらに、平成 18 年度からはじまっている民間からの寄附講座の開設やそれに伴うメディアイベントの開催などを通じて、実践的な研究に対応できる成果発表の拡大化と多様化に対応できる体制を構築している。

資料 3-3 映像研究科の研究組織(イメージ図)



3. 積極的な外部資金の導入

競争的資金を含む外部資金の積極的な導入は映像研究科の研究における大きな特徴である。科学研究費はもとより、科学技術推進機構(JST)の戦略的創造研究推進事業(チーム型研究、さきがけ共同研究)などのプロジェクト資金の導入も一因となっており、映像研究科の研究活動は開設3年目にして活性化している。また、民間企業からの寄付講座、横浜市との提携等自治体から受託事業、受託研究などの外部資金は、映像メディア研究にとってユニークな産官学連携研究体制の試金石となりつつある(資料 3-4 参照)。

資料 3-4 映像研究科外部資金導入一覧

(資料 3-2 に記載のものを含む)

種類	代表者	題目	委託者／相手先等	年度
受託研究	藤幡正樹教授	デジタルメディアを基盤とした新しい芸術創造に関する研究	独立行政法人科学技術振興機構	17、18、19
受託研究	桐山孝司准教授	物語性を重視するデジタルメディアの制作配信基盤	独立行政法人科学技術振興機構	17、18、19
共同研究	桂英史准教授	全天周と極小領域映像を扱うための入出力機器の研究開発	独立行政法人科学技術振興機構	19
受託事業	映像研究科長	横浜市文化芸術創造都市づくりの推進に向けた地域貢献事業	横浜市都市経営局長	18、19
受託事業	桂英史准教授	(仮称)産業技術保存継承センターオープニング事業企画・設計	北九州市	18

		及び監理委託		
受託事業	藤幡正樹 教授	国際シンポジウム「映画作りは学校で学べるか？」	文化庁	17
共同事業	堀越謙三 教授	「夕映え少女」(仮題) 共同制作	ジェネオンエンタテインメント 株式会社	19
共同事業	藤幡正樹 教授	「ポケット・フィルム・フェスティバル」	ソフトバンク、シャープ、(株)電通	19
科学研究費	石橋今日美助手	映画におけるデジタル映像技術の応用－創造的価値と歴史的位置づけについて	若手(スタートアップ)	19
科学研究費	桂英史准教授	地域精神医療と芸術表現に関する総合的研究	基盤研究(B)(一般)	18
寄附講座		コンテンツ産業研究分野	(株)電通	18、19

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を大きく上回る

(判断理由)

このように各研究チームの、あるいは専任教員個々の映像研究科発足以来 3 年間にわたる研究活動は、当初の計画通り(あるいはそれ以上に)順調に推移している。

国内外の研究者・表現者との研究レベルでの交流も活発化しており、具体的な成果が出始めている(分析項目Ⅱの資料3-5(P.3-8~3-9)参照)。また、競争的な外部資金を積極的に獲得しており、各プロジェクトとその成果は財政的な基盤をそれらに負っている(資料3-4(P.3-6~3-7)参照)。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 研究成果の状況

(観点に係る状況)

1. 設置目的に見合った成果

本研究科の研究における特徴は、博士後期課程映像メディア学専攻を基礎とした研究組織で、映画製作の専門家、メディア芸術のアーティストといった「つくる」ことを現業としている専門家のみならず、情報工学や文化研究の異なった研究分野にわたる研究者を擁して、「つくる」という観点から映画をはじめとするメディア芸術に関する研究を学際研究として推進できる体制につくる。

これにより、他の研究機関では実施し難い学際領域、複合領域、境界領域における機動性の高い研究体制を実現している。さらにスタジオや上映室等を有し、社会と直結した新しい成果発表の場づくりも研究体制のなかにふくんでいる。

発足して3年で、映画(監督・作品)はもとより、メディア芸術などの分野においても、国際的にも独創的な表現形態を創出してきた。各専任教員や共同研究員の研究業績はそのことを如実に反映している。

たとえば、他大学や他分野とのチーム型研究である「デジタルメディア作品の制作を支援する基盤技術」は、本研究科の特長である異なる分野の研究者が共同して成果を上げるというシナジー効果を発揮しつつあり、シミュレータやロボティクスといった情報工学の開発研究にも大きく貢献している。また、これらのシナジー効果により、メディア芸術の知見を基礎とした「描画過程研究」やアートプロジェクトの知見を基礎とした「地域精神医療アートプロジェクト」といった新しい学際領域分野の開拓も行い、他分野の研究者から得た多くの賛同に基づき共同研究体制ができつつある。これらは本研究科の研究体制に基づく先端的・独創的なプロジェクト研究の良い例である。

資料3-5 主な研究業績一覧

※丸数字は、資料3-2のプロジェクトの丸数字に対応。

	黒沢清監督作品『トウキョウソナタ』(2008年・監督・脚本:黒沢清) ※研究業績説明書 27-03-1003
	北野武監督作品『監督・ばんざい』(2007年・監督・脚本・編集:北野武、録音:堀内戦治)
	北野武監督作品『TAKESHIS'』(2005年・監督・脚本:北野武、録音:堀内戦治)
	河瀬直美監督作品『殞(もがり)の森』(2007年・美術:磯見俊裕) ※研究業績説明書 27-03-1004
	筒井武文監督作品『オーバードライブ』(2004年・監督:筒井武文、美術:磯見俊裕、録音:堀内戦治)
	フォレスト・ウィテカー監督作品『ホワイト・プリンセス』(2005年・撮影:栗田豊通)
	三池崇史監督作品『インプリント ～ぼっけえ、きょうてえ～』(2006年・撮影:栗田豊通)
	堀江慶監督作品『ペロニカは死ぬことにした』(2006年・脚本および製作:筒井ともみ)
	高橋洋監督作品『ソドムの市』(2004年・製作:堀越謙三)
①	藤幡正樹「描画を通じたコミュニケーション・モデル/子供の描画の観察方法」 「Crest21Art シンポジウム『描く』を科学するープロセスで読み解く」ヒルサイドテラス 2007.3.23 ※研究業績説明書 27-03-1001
③	佐藤雅彦「A-POC INSIDE」ISSEY MIYAKE パリコレクション 平成19年 ※研究業績説明書 27-03-1002
③	佐藤雅彦+桐山孝司「計算の庭」六本木クロッシング 2007:未来への脈動、森美術館
①	Masaki Fujihata, "Anima, art and artifact" - On tombs, cities, cars and robots", In Proceedings of IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS), 2007
①	藤幡正樹「不完全さの克服」展 CCGA グラフィックアートセンター 平成18年
①	藤幡正樹「Off-Sense 離常識」展 キヤノンギャラリー 平成18年
①	藤幡正樹「Field-works」展 ジュネーブ現代映像センター 平成17年

①	藤幡正樹「無分別な鏡 Unreflective Mirror」展 ICC 平成 17 年
③	桐山孝司「物語性とインタラクティブメディア」東京大学情報学環紀要 No.70 平成 18 年
③	桐山孝司「ユーザー・エクスペリエンスのための物語性研究」情報処理 Vol. 47 No. 4 (通巻 494) 平成 18 年
③	Brodersen, C., Bodker, S., Klokmose, C.N. (eds.): Yasumoto, Kiriya: "Multiple and Ubiquitous Interaction", DAIMI PB-581, University of Aarhus, p.47 (2007)
②	TOMOYUKI SAIJO, EISHI KATSURA, TADASHI KAWAMATA, SHOHEI YAMAGUCHI, REISIU SAKAI, YOSHIRO OKUBO AND KUNIHICO ASAI "A Work In Progress: Designing the Achievements of the Dehospitalized Self-education," XIII WORLD CONGRESS OF PSYCHIATRY ;Cairo, September 10-15, 2005 Cairo Egypt
②	桂英史『ドキュメントディレクターの専門性』アート・ドキュメンテーション学会第 16 回(2005 年度) 年次大会講演 H17.6
①	「アート+テクノロジー+エンタテインメント=?! 325 人の研究者たちの予感」日本科学未来館 (東京・お台場) サイバーアトリエ, 予感研究所 JST May 2006 東京 ・油絵描画ロボット (ドットちゃん) (東京大学) ・油絵調描画シミュレーション・システム (東京工業大学) ・見ると描くを楽しむ (埼玉大学)
①	Takashi Yoneyama, Kunio Kondo, Masaki Fujihata, " Vision based Feature Analysis of Paintings and Image Synthesis using 3D models", ADADA2006 Proc. of the 4th annual conference of Asia Digital Art and Design Association, pp.132-133, 2006
①	米山孝史, 近藤邦雄, 藤幡正樹, " 視覚に基づく絵画の特徴分析とパラメータ変換の提案" 画像電子学会 2006 年度第 34 回年次大会予稿集, pp.7-8, 2006 (研究奨励賞)
①	米山孝史, 近藤邦雄, 藤幡正樹「見るを描く」: 視覚に基づく絵画の特徴分析, 画像電子学会 ビジュアルコンピューティングワークショップ 2006、2006.10
①	米山孝史, 近藤邦雄, 藤幡正樹: 視覚に基づく絵画の特徴分析と画像生成手法, 第 69 回情報処理学会全国大会講演論文集, 2X-5, 2007.3

2. 研究成果の多様な発表形態

研究活動の成果は論文、著書等のみならず、上映、展示、シンポジウムなど多様な形態で公表される。また、これらの成果に裏付けられた教員の活動は国内外の国際的な映画祭や国際展覧会(ビエンナーレ)はもとより、学界、産業界あるいは国の文化芸術政策の中で高く評価されている。さらには二次流通しているコンテンツ商品も数多い。

平成 17 年度の開設以来平成 19 年度までの 3 年間に映像研究科の講師以上の教員に授与された賞は、国際的な映画祭やフェスティバル、学協会からの賞を含めてその数は 6 件に及び、教員 4 人に 1 人が賞を受けていることになる。

資料3-6 受賞例一覧(平成 16~19 年度)

職	氏名	受賞名	受賞対象作品名・部門	国内外の別		受賞年
				国内	国外	
教授	磯見俊裕	第 60 回カンヌ国際映画祭グランプリ (美術)	「殞(もがり)の森」		○	平成 19 年
教授	佐藤雅彦	ニューヨークADC賞 Gold Prize	ISSEY MIYAKE のバリコレクションのための映像 「A-POC INSIDE」に対して		○	平成 19 年
教授	佐藤雅彦	毎日デザイン賞		○		平成 18 年
教授	佐藤雅彦	(第 11 回)文化庁メディア芸術祭優秀賞		○		平成 19 年
教授	堀越謙三	第 23 回川喜多賞		○		平成 17 年
教授	堀越謙三	日本映画ペンクラブ・功労賞		○		平成 18 年
教授	筒井ともみ	第 27 回日本アカデミー賞最優秀脚本賞	「阿修羅のごとく」	○		平成 16 年

3. 国際性・先進性・先導性

映像研究科における研究は個人作家の資質や才能に依存した成果だけでもすでに国際的であるという点では突出しているが、それに加えて、プロジェクト型の研究スキームを活用し、そこから関連領域に映像表現にとって重要なテーマを提供すると同時に作家の資質や才能を発見していくという点で世界的に見ても先進性がある。

また、映画製作や作品制作を主体とした作家主導の研究制作だけでなく、情報(入出力機器、インタフェース開発など)、ヒューマノイドに関する研究、あるいは都市計画などの社会システムに関わる研究、人間の存在と振る舞いを対象とする研究、認知科学や医学・医療との境界領域など、研究対象分野の多様性を考慮した研究スキームとその成果は、映像メディアの領域を表現という観点から切り拓き分野の多様性をもたらしている点で先導性を兼ね備えている。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を大きく上回る

(判断理由)

本研究科における研究活動の結果は、「研究業績説明書」に示すように、「つくる」という観点を重視した「臨床知」を研究の対象とする基本方針に沿って、学術論文だけでなく上映や展示など多岐にわたる。また、学術論文のみならず国際的な映画祭やイベントに招聘された上映や展示あるいはワークショップが多いことも特徴である。そのうちのいくつかは、すでに国際的に高い評価を得ており、4名が合計7件の賞を受けている。さらに、この3年間に、映像研究科で受け入れた外国人研究者は、長期・短期滞在者を合計して約10名、国際的な映画祭やイベントなどにおける教員の招待講演も多く、国際的な研究交流活動に関しても十分に成果をあげている。

Ⅲ 質の向上度の判断

①事例1「プロジェクトチーム編制による質の向上」(分析項目Ⅰ研究活動の状況より)

(質の向上があったと判断する取組)

まずは、映像研究科が確立しようとしている映像メディア学は作家主導の制作だけでなく、プロジェクト型の研究スキームを活用し、そこから作家の資質や才能を発見し、理論や方法論を体系化していくという点でユニークであることを強調しておきたい。

その上で新しい分野を切り拓きつつあるメディア芸術というスキームにあってチーム型研究1件、個人研究2件(うち1件は共同研究)が科学技術推進機構戦略的創造研究推進事業CREST研究領域「デジタルメディア作品の制作を支援する基盤技術」に採択され、「未来の映画」や「映像表現の新しい可能性」などについて先導的な研究が遂行されていることは、映像研究科における研究の質の向上に大きく寄与している。映像研究科における今後の研究活動は従来にもまして、世界に貢献する研究を積極的に進めていくことが求められている。その際、問題となるのは、諸施設が間借りであるための制約、スペースそして研究費の不足、定員削減に伴う支援スタッフの不足である。研究費についてはコンテンツ関連の公的な助成や民間からの導入などに関する組織的な努力を続ければ、より一層質の向上が期待できる。

(資料3-2(P.3-4~3-5), 資料3-4(P.3-6~3-7)参照)

②事例2「研究成果の多様な形態による質の向上」(分析項目Ⅰ研究成果の状況より)

研究活動の成果は論文、著書等のみならず、上映、展示、シンポジウムなど多様な形態で公表される(資料3-5(P.3-8~3-9)参照)。映画専攻やアニメーション専攻の教員による国際的な映画祭やフェスティバルへの出品・招待はもとより、学界、産業界あるいは国の文化芸術政策の中で高く評価されている。さらには二次流通しているコンテンツ商品も数多い。

理工系分野との連携型プロジェクトにあっては、理工系大型研究プロジェクトにおける短期集中型の研究、短期間でよりインパクトの大きな成果のあがりやすい学会での口頭発表などの研究成果のみが重視される傾向が強くなりがちである。しかしながら、表現分野での研究成果は論文という形態だけでは不十分であり、作品展示やワークショップあるいはドキュメント製作といった創造の生々しさを伝えていく形態も同時に必要とされる。その形態の多様さが次なる連携や外部資金の導入、あるいは映像メディア表現というスキームにおける新しい産学共同の試金石にもなる。

このような考え方に基づいて、映像研究科ではポケットフィルムフェスティバルの開催(資料3-7(P.3-12), 資料3-8(P.3-12~3-13)参照)など、映像メディア表現分野における研究成果そのもののあり方にも、一石を投じている。その意味でも先進性、先導性、国際性を備えており、開設3年にして質の向上は学外においてもすでに目に見えるかたちで結実している。

また、長期的視点に立てば、地道で着実な研究・創作を妨げることなく共存できる体制と国際的にもユニークな基盤の整備(たとえば、図書館、フィルムライブラリー、デジタルアーカイヴなど)が実現すれば、より活発で有機的な研究成果の交換や共有、それに基づく研究者や表現者の実際的な交流がさらに活発化することが期待される。

資料 3-7 ポケットフィルムフェスティバル公式 Web 抜粋

www.pocketfilms.jp

Japanese English

POCKET FILMS Festival in Japan

2007.12.7 (FRI) | 8 (SAT) | 9 (SUN)
ポケットフィルム・フェスティバル

東京芸術大学
Tokyo National University of Fine Arts and Music

forum des images

▼ 開催概要 ▶ 作品募集 ▶ ニュース ▶ プログラム ▶ スケジュール・地図 ▶ 受賞作品

■ はじめに ■ 実行委員長挨拶 ■ 開催概要 ■ フランスでの「ポケットフィルム・フェスティバル」

はじめに

ポケットフィルム・フェスティバルは、「実用的なハイテクおもちゃ」が潜在的に持っている映像表現の可能性を探求し、多様なメディアを介して、感性を刺激するコミュニケーションのあり方を築くことを目指しています。実際、それはアーティストにとっても自明ではありません。フランスの若手映画作家ジャン＝シャルル・フィットゥスは昨年、東京芸術大学大学院映像研究科のレクチャーで、古典的な映画作りから携帯電話ムービーに興味を抱き、1時間を超える長編を撮り上げるに至った動機を次のように語りました。「ある日、ドライブしていると、平原を横断する雲の群れの影に気づいて、どうしてもそれを撮りたいと思った。でも、あいにくカメラを持っていなかった。全速力で機材を取りに帰っても、同じ光景は撮れない。携帯電話なら、いつでも持っているから、撮りたいと思った瞬間を逃すことはないのだ」。常に持ち歩けるカメラがもたらす、はかり知れない自由と創造的可能性をいかに活用できるのか？本映画祭はそれを問う場でもあります。

日本初の試みとなるこのフェスティバルは、東京芸術大学と2005年から「Pocket Films Festival」を主催している他、年間計千本に及ぶ特集上映会等、多彩な映像イベントを行っているパリの「フォーラム・ド・イメージ(Forum des images)」の提携の下、開催されます。携帯の映像を映画作品としてスクリーンに投影するという、映画の都パリのエスプリと映画祭の形式を継承すると同時に、日本独自の企画も展開してゆきます。

PAGE TOP

SoftBank SHARP

FAQ - お問い合わせ

Copyright © 2007 Pocket Films Festival in Japan. All rights reserved.

資料 3 - 8 ポケット・フィルムフェスティバル報道データ

日付	媒体	媒体名	番組/コーナー/見出し など
2007/12/12	携帯	QuickTV	「ケータイ魂(スピリッツ)」ケータイ NewsFlash(毎週水曜日 18 時更新) ※ DoCoMo から視聴可能
2007/10/18	雑誌	Web Designing	1 億 2000 万人 総アーティスト時代
2007/11/19	雑誌	CUT	イベント情報
2007/11/24	雑誌	Invitation	パリ発、携帯電話ムービーによる映画フェスティバルが日本初上陸
2007/12/9	雑誌	読売ウィークリー	ポケットフィルム・フェスティバル 東京芸術大学映像研究科横浜キャンパス新港校舎、馬車道校舎
2008/1/20	雑誌	WEDGE	読む TV 携帯電話の映画祭 東京の 24 時間を観る
2007/7/6	新聞	朝日新聞夕刊	熱いケータイ映像
2007/9/14	新聞	日経新聞	ソフトバンクと東京芸大、携帯で撮影した作品の映画祭
2007/9/14	新聞	スポニチ	東京芸大とソフトバンクがコラボ
2007/10/13	新聞	毎日新聞	小学生が「携帯」映画に挑戦—八王子・一小 NPOが撮影法指南
2007/10/18	新聞	毎日新聞	携帯撮影の動画映画に一墨田押上小で授業
2007/10/25	新聞	毎日小学生新聞	携帯電話で映画作り 東京都墨田区押上小
2007/11/3	新聞	毎日新聞	初の「ケータイ映画祭」来月開催
2007/11/21	新聞	日本経済新聞	携帯で撮影、初の映画祭
2007/12/1	新聞	神奈川新聞	市民の広場 ポケット・フィルムフェスティバル 携帯電話による日本初の映画祭
2007/12/3	新聞	東京新聞	ネットの話題 初の「ケータイ映画祭」心動くままに撮る新たな芸術
2007/12/5	新聞	毎日新聞 夕刊	日本初の携帯映画祭 7日から横浜で 48 作品を上映
2007/12/8	新聞	毎日新聞	ポケットフィルム・フェスティバル:国内初の携帯映画祭が開幕
2007/12/9	新聞	Zaobao (SPH)	※シンガポール最大の中国系新聞

2007/12/11	新聞	毎日新聞	ポケットフィルムフェス開幕
2007/12/17	新聞	東京新聞	ネットの話題
2007/12/18	新聞	東京 IT 新聞	ポケットフィルム・フェスティバル大賞決定、イベント開催 携帯＝電話という概念を超えて
2008/1/8	新聞	毎日新聞 夕刊	”携帯電話映画祭”大賞は「720/24」に
2007/12/7	通信社	AP 通信	ニュース配信
2007/9/14	通信社	共同通信	ケータイ映像の映画祭開催 東京芸大とソフトバンク
2007/9/24	テレビ	tvk	日本初の携帯映画祭
207/10/2	テレビ	NHK	日本初の携帯映画祭
2007/12/4	テレビ	テレビ朝日	やぐちひとり◎ 藤幡実行委員長がゲスト出演。25:34 頃から 7 分間、ポケットフィルム・フェスティバルが紹介されました。
2007/12/7	テレビ	tvk	ニュース 17:30～
2007/12/7	テレビ	イツコム	イツ 365 17:00～ お出かけ情報
2007/12/8	テレビ	NHK	おはよう日本「首都圏」7:30～
2007/12/8	テレビ	tvk	Hi! 横浜編集局 18:00～
2007/12/11	テレビ	日本テレビ	NEWS ZERO 23:40～ 携帯電話で映画制作ポケットフィルム・フェスティバル
2007/12/11	テレビ	フジテレビ	FNN スピーク 11:30～12:00 ニュースの最後(天気予報の前)に紹介
2007/12/14	テレビ	フジテレビ	めざましテレビ「ヒト調」 7:16～7:25 東京芸大・末宗さんの作品制作に密着取材、中野アナのリポートなど
2007/12/14	テレビ	MTV JAPAN	MTVニュース 実行委員長インタビューほか
2007/12/24	テレビ	NHK	おはよう日本「首都圏」7:11～ 携帯電話の動画が拡大しているという事例の一つとしてポケットフィルム・フェスティバルが紹介されました。
2007/12/25	テレビ	テレビ朝日	やぐちひとり◎ 25:10～26:10 携帯シネマ・フェスティバル受賞作品決定!
2007/12/31	テレビ	tvk	音楽で年を越しますtvk 25:50～25:55
2007/9/14	ネット/オンライン	日経NET	ソフトバンクと東京芸大、携帯で撮影した作品の映画祭
2007/9/14	ネット/オンライン	日経NETモバイル	ソフトバンクと東京芸大、携帯で撮影した作品の映画祭
2007/9/14	ネット/オンライン	ケータイ watch	東京芸大とソフトバンク、携帯を使った映画祭を開催
2007/9/14	ネット/オンライン	ITmedia	ケータイ動画の祭典「ポケットフィルム・フェスティバル」を横浜で開催—東京芸大とソフトバンク
2007/9/14	ネット/オンライン	RBB TODAY	日本初の携帯電話で撮影した映画祭「ポケットフィルム・フェスティバル」開催
2007/9/14	ネット/オンライン	CNET	ケータイは今や映画撮影の道具に—「ポケットフィルム・フェスティバル」開催
2007/9/14	ネット/オンライン	livedoorNEWS	日本初の携帯電話で撮影した映画祭「ポケットフィルム・フェスティバル」開催
2007/9/14	ネット/オンライン	JCN Newswire	ソフトバンク、日本初の携帯電話によるムービーフェスティバル「ポケットフィルム・フェスティバル」開催
2007/9/14	ネット/オンライン	ケータイ watch	ソフトバンクと東京芸大が仕掛けるケータイ映画祭
2007/9/14	ネット/オンライン	カナコロ	横浜で日本初開催、携帯で撮影した作品使い映画祭
2007/9/14	ネット/オンライン	カナコロ	横浜で日本初開催、携帯で撮影した作品使い映画祭
2007/9/18	ネット/オンライン	ITmedia	「ポケットフィルム・フェスティバル」ってなに? : 「写メール」のように「ポケットフィルム」のカルチャー広めたい—藤幡正樹氏
2007/9/18	ネット/オンライン	ヨコハマ経済新聞	日本初の携帯ムービーフェスティバル—横浜で開催
2007/9/19	ネット/オンライン	nOObs	「ポケットフィルム・フェスティバル」携帯ムービーで世界を目指せ
2007/9/19	ネット/オンライン	eventcast incs	ポケットフィルム・フェスティバル POCKET FILMS Festival in Japan あと 74 日
2007/10/9	ネット/オンライン	公募ガイド	(参考)公募ガイドにおいて公募アワード 2007「クリエイティブ賞」を受賞しました■ 選考理由:ここ数年、ケータイを利用したコンテンツが急激に増加しました。ケータイフォトや小説といったジャンルは今ではすっかりおなじみになりましたが、ケータイを使った映画祭というのは、非常に斬新な試みです。常に進化していくケータイの、さらなる可能性を感じさせる企画です。
2007/11/19	ネット/オンライン	Yahoo!動画	一映画—「ポケットフィルム・フェスティバル」
2007/11/22	ネット/オンライン	tvkコミュニケーションズ	アートチャンネル 10 作品、各 30 秒抜粋掲載
2007/12/3	ネット/オンライン	東京新聞	ネットの話題 初の「ケータイ映画祭」心動くまま撮る新たな芸術
2007/12/3	ネット/オンライン	東急沿線スタイルサイト「SALUS」	みなとみらい周辺のニュース一覧 携帯電話を撮影機材とした映画祭「ポケットフィルム・フェスティバル」開催
2007/12/4	ネット/オンライン	sperfuture.com	yokohama:moviemania don't miss picket films festival,japan's first mobile phone film festival at the yokohama shinko campus on dec 7-9
2007/12/5	ネット/オンライン	毎日jp	日本初の携帯映画祭 7 日から横浜で
2007/12/5	ネット/オンライン	white-screen.jp	white-screen.jp
2007/12/6	ネット/オンライン	ITmedia	”ケータイで撮った映画”祭「ポケットフィルム・フェスティバル」12月7日開幕
2007/12/7	ネット/オンライン	ケータイ watch	ケータイ映画祭「ポケットフィルム・フェスティバル」開幕
2007/12/7	ネット/オンライン	abc NEWS	Films Shot on Camera Phones Get Showcase
2007/12/7	ネット/オンライン	BusinessWeek	Films Shot on Camera Phones Get Showcase
2007/12/7	ネット/オンライン	MIT Technology Review	Japan holds works shot on camera-equipped cell phones
2007/12/7	ネット/オンライン	San Jose Mercury (Mercury News.com)	Japan puts phone films in its Pocket
2007/12/7	ネット/オンライン	THE HOLLYWOOD REPORTER	Japan puts phone films in its Pocket
2007/12/7	ネット/オンライン	USA TODAY	Japan honors films made via cellphones

2007/12/7	ネット/オンライン	washingtonpost.com	Films Shot on Camera Phones Get Showcase
2007/12/7	ネット/オンライン	modbee.com	Films Shot on Camera Phones Get Showcase
2007/12/7	ネット/オンライン	Local news leader	Japan festival shows cell phone films
2007/12/7	ネット/オンライン	Herald News Daily	Japan festival shows cell phone films
2007/12/7	ネット/オンライン	Idaho Statesman.com	Films Shot on Camera Phones Get Showcase
2007/12/7	ネット/オンライン	PHYSORG.com	Films Shot on Camera Phones Get Showcase
2007/12/7	ネット/オンライン	Yahoo!News	Japan holds cell-phone film festival
2007/12/8	ネット/オンライン	毎日.jp	ポケットフィルム・フェスティバル:国内初の携帯映画祭が開幕
2007/12/8	ネット/オンライン	TOKYO Web	携帯で映画祭 あすまで横浜で日本初のフェス
2007/12/8	ネット/オンライン	Telegraph.co.uk	Festival for mobile phone films in Japan
2007/12/8	ネット/オンライン	毎日.jp	ポケットフィルム・フェスティバル:国内初の携帯映画祭が開幕
2007/12/8	ネット/オンライン	オーマイニュース	TV ケータイ電話の映画祭! ? ポケットフィルムフェスティバルが開かれる
2007/12/8	ネット/オンライン	オーマイニュース	記事 ケータイ電話の映画祭! ? ポケットフィルムフェスティバルが開かれる
2007/12/9	ネット/オンライン	ケータイ watch	ケータイ映画祭「ポケットフィルム・フェスティバル」の大賞決定
2007/12/10	ネット/オンライン	Yahoo!動画	ポケットフィルム・フェスティバル一次通過作品掲載
2007/12/12	ネット/オンライン	日経トレンディネット	政木桂の「トコト楽しむビデオ道場」「ポケットフィルム・フェスティバル in Japan」レポート—携帯電話で映画を作る(2)
2007/12/13	ネット/オンライン	Yahoo!動画	第一回ポケットフィルム・フェスティバル受賞作品を公開!
2007/12/14	ネット/オンライン	MTV JAPAN	携帯で映画製作!「ポケットフィルム・フェスティバル」開催
207/12/14	ネット/オンライン	STELLA	STELLA CINEMA「シネマ NEWS」携帯ムービーが作品に! 日本初の映画祭が横浜で開催—「第1回ポケットフィルム・フェスティバル」
207/12/17	ネット/オンライン	STELLA	STELLA CINEMA「シネマ NEWS」携帯ムービーが作品に! 日本初の映画祭が横浜で開催—「第1回ポケットフィルム・フェスティバル」
207/12/17	ネット/オンライン	中日新聞	初のケータイ映画祭大賞 初のケータイ映画祭「ポケットフィルム・フェスティバル」の大賞は、東京の24時間の風景を映像化
207/12/18	ネット/オンライン	東京 IT 新聞	ポケットフィルム・フェスティバル大賞決定、イベント開催 携帯=電話という概念を超えて
2007/12/31	ネット/オンライン	tvk	音楽で年を越しますtvk 25:55~26:10
2008/1/7	ネット/オンライン	South China Morning Post	Films Shot and edited on cellphones are coming to a small screen near you
2007/11/26	フリーペーパー	R25	Precious! R25 日本初上陸!! 携帯電話によるムービーイベント「POCKET FILMS Festival in Japan」
2007/12/3	フリーペーパー	Job aidem(首都圏版)	イベント情報
2007/12/3	フリーペーパー	Job aidem(首都圏版)	イベント情報
2007/12/6	フリーペーパー	L25	ポケットフィルム・フェスティバルが横浜で開催 ケータイ動画機能で撮ったオモシロ映像を見に行こう
2007/12/7	フリーペーパー	シティリビング	30 面
2007/9/25	ラジオ	J-WAVE	日本初の携帯映画祭
2007/12/4	ラジオ	J-WAVE	COLOUR YOUR DAYS 若手指名作家の千葉大樹氏がパーソナリティを務めている、J-WAVE 「RENDEZ-VOUS」の”COLOUR YOUR DAYS”コーナー内で紹介
2007/12/4	ラジオ	TOKYO FM	SKY7:20~7:30の約10分間、藤幡実行委員長が電話で生出演
2007/12/8	ラジオ	NHK ラジオ	ラジオ朝いちばん 7:40~首都圏情報
2007/12/8	ラジオ	FM Salus	E-Style 11:25~35 実行委員長インタビュー生放送